

ISSN 0388-0176

中・四国
アヌリカ文学研究

第44号

2008年6月

中・四国アヌリカ文学会



中・四国
アメリカ文学研究

Chu-Shikoku

Studies in American Literature

No. 44

June 2008

中・四国アメリカ文学会

The Chu-Shikoku American Literature Society

目 次

論 文

- Light in August* における人間存在の特別さと流転する世界の無関心との相克
.....本 田 良 平 1
- 転覆する階層関係
——Louisa May Alcott の *Under the Lylacs* におけるサーカス表象——
.....本 岡 亜沙子 13
- 第36回大会シンポジウム報告
メルヴィルとポストコロニアリズム
.....藤 江 啓 子、藤 本 幸 伸 23
辻 祥 子、大 島 由起子
- 書 評
- 今村循夫編著 「アーネスト・ヘミングウェイの文学」
.....本 荘 忠 大 41
- 廣瀬英一著 「ジョン・ドス・パソスを読む」
.....上 西 哲 雄 43
- Yoshifumi Kato and Scott Pugh, eds. *John Steinbeck: Global Frameworks*
.....濱 口 脩 45
- 杉浦悦子著 「アジア系アメリカ作家たち」
.....元 山 千 歳 47
- 上岡克己／上遠恵子／原強 編著 「レイチェル・カーソン」
.....松 永 京 子 49

CONTENTS

Articles

The Conflict between the Preciousness of Human Existence and
the Detachment of the Universe Eternally in Flux in *Light in August*
..... HONDA Ryohei 1

A Subversion of Hierarchical Systems:
Circus Representations in Louisa May Alcott's *Under the Lilacs*
..... MOTOHKA Asako 13

Report of Symposium at the 36th Conference

Melville and Postcolonialism
..... FUJIE Keiko, FUJIMOTO Yukinobu 23
TSUJI Shoko, OSHIMA Yukiko

Book Reviews

..... HONJO Tadahiro, UENISHI Tetsuo 41
HAMAGUCHI Osamu, MOTOYAMA Chitoshi
MATSUNAGA Kyoko

Light in Augustにおける人間存在の特別さと 流転する世界の無関心との相克

本田良平

序

Light in August (1932、以下LA)の特異な点の一つは、冒頭及び最後の部分と中間部分とのトーンの対照である。作品はLena Groveの描写により幕を開ける。Lenaは彼女を孕ませ逃げ出した男を素直に信頼して、Alabamaから遥々MississippiのJeffersonまでやってきた女性であり、そうした彼女の旅の様子はその背景を成す広大な自然のイメージと結びつき、時間を超越したような悠然とした雰囲気醸し出す。ところが作品の中間部分に現われるのは、特異な運命により破滅する、あるいは自らを縛り続ける人物達である。彼らの物語は重苦しく、作品中間部は暗く閉ざされたトーンを醸し出す。そして作品は、再び旅を続けるLenaの、冒頭と同じように伸びやかなトーンによって幕を閉じる。

このようにLAを巨視的に眺めれば、世界は一つの巨大な流れの中で変化し続けるというBergson的見地からこの小説を読み解くDarrel Abelが提示する、各登場人物の物語を“eternity”（永遠に続いてゆく流転）を背景にした束の間のレリーフ彫刻とする見方は妥当である。Abelによると、各人物の“personal realities” (111) は、茫漠たる永遠を背景にすると、普遍の人間像である“a human reality” (111) に溶け込み、各々の個性は埋没してしまう。上の構図にあてはめれば、小説内の個々人の悲劇は、旅するLenaが象徴する永遠の流転の内に包まれることで和らげられ、平坦化されるのである。¹

しかし各々の登場人物の物語を実際に読み進める時、それらは読者に対し、異様な迫力で個性性を主張する。各人物はそれぞれの過去や欲望を持ち、それを基に己だけの自己像を作り上げる。そして各個人はそれを自らの個性の拠りどころとし、意識的であれ、無意識的であれ、己の存在が固有で特別なものであることを信じる。

そこで本論では、このような個々の人物の人間存在の特別さと、その特別さを卑小化する、永遠に流転する世界の無関心に着目し、両者の間に生じるテンションを明らかにする。さらに、本作品においてこれら二つの要素の相克がもっとも著しい、Gail Hightowerの第20章に焦点を絞り、この章における作家の人間観を解明したい。

I Joe Christmasの過去の声が示す人間存在の特別さ

LAで描かれる個々人の存在の特別さに着目する必要があるのは、Faulkner作品では登場人物の内面が生々しく密な感触で読者に迫ってくるからである。Kristin Morrisonはそれを、登場人物

の“mind-voice”(148)の巧みな提示によるものであるとする。彼によれば、Faulknerは登場人物の内面を描く際、その人物の意識を外から描くのではない。作家はそれを人物の内側から、しかも重要なことには、その人物自身では言語化できない無意識の領域までも鋭敏化した感知力で掬い上げ、さらに、その人物自身の能力を超えた詩的、哲学的語彙を駆使して、それらに最大の表現力を与える一つまり、登場人物の意識を“heightened voice”(150)として提示するのである。こうして提示された人物の内面は、その人物の深層から湧いてくる、増幅された声の集積としての意識だと言える。そして読者はそうした声で充満した濃密な語りの中、言わばその人物の内面を呼吸しながら読み進んでゆく。

LAにおけるこの“heightened voice”の最も顕著な例を、MorrisonはJoanna Burden殺害直前の、長いフラッシュバックを駆使したJoe Christmasの内面提示に見出し、それを“what is literally and figuratively the center of the book”(154)と述べている。Morrisonの指摘は正しいが、注目すべきことは、Joanna殺害前夜、共に神に祈ることを執拗に勧める彼女への怒りで苛立つChristmasが、夜の闇の中タバコに火をつけた後のマッチを捨てる場面に、既にそのような内面の“heightened voice”の予兆を見て取れることである。

Then he was listening for the light, trivial sound which the dead match would make when it struck the floor; and then it seemed to him that he heard it. Then it seemed to him, sitting on the cot in the dark room, that he was hearing a myriad sounds of no greater volume—voices, murmurs, whispers: of trees, darkness, earth; people: his own voice; other voices evocative of names and times and places—which he had been conscious of all his life without knowing it, which were his life [. . .]
(105)

Joanna殺害によりChristmasもまた処刑されることを考えると、彼が暗闇の中に投げ捨て、中空で火が消え、聞こえたかどうかともわからぬ小さな音をたてて床に落ちたマッチは、人生の途中で消えて行く、取るに足らない小さな存在を、即ち彼の死の可能性と、その卑小な存在を提示していると言える。それ故、そこで聞こえてくる“a myriad sounds”は、彼の特異な人生を形成している彼の過去が、死の虚無性に対抗するかのように、凝縮された総体としての姿を一瞬垣間見せたもののように見える。

そして、このような過去の総体としての内面の声が生えていけばこそ、次の晩、Joanna殺害の前に彼女の屋敷の外に身を潜めていたChristmasは、過去を語る声に無意識的に沈潜する。そして、孤児院時代から現在に至るまでの彼の記憶をくぐり抜けてゆく中、読者には彼の人生の模様、それが現在に否応なく及ぼす影響が徐々に見えてくる。彼が幼少の頃から、他の人間と違うことや世界と敵対することで、自己を形成し守って来たこと。またそれによる、女性の愛や優しさに対する困惑、拒絶。そしてそれとは裏腹の、本能的な女性の愛への欲求。こうした過去の要素こそが、Joannaから決して離れることができない反面、彼女への反発を募らせていく彼の現在を規定している。その意味で、Joseph W. Reed, Jr.の“The repetition and recurrence of what was in what is produces a necessary belief in [. . .] what *must be* [. . .]”(129)というChristmasの人生に関する評言は全く正しい。Christmasの無意識も含めた記憶の中の過去の要素は、彼の現在に繰り返し立ち昇ってくる。そしてそれら過去の要素が、Christmasの現在に影響を及ぼしながら、これから行う行為の必然性を彼が信じて疑わないほどまでに、彼を衝き動かすに至る。第6章のフ

ラッシュバックの始まりの一文である“Memory believes before knowing remembers.” (119) の、「記憶」が「信じる」とは、このことを意味するのである。このように彼の行動を否応なく決定する、蓄積された過去の緻密な有機体とでも呼ぶべき彼の人生の総体は、彼固有の宿命としての様相を帯び、彼個人の存在が特別なものであることを印象づける。そして宿命の圧力に盲目的に従うChristmasは、無意識的にその絶対性を信じている。一方読者もまた、Christmasの意識の声をくぐり抜けることで彼の宿命の力が醸成される過程を直接的に体験し、それをあたかも実体のような生々しい手触りで感じるまでになるのである。

II 流転する世界の無関心

Joanna殺害直前の長いフラッシュバックには、Joe Christmasの人間としての特別さを如実に感じさせる内面の声が生々しく伝えられていた。だが、物語が再びJoanna殺害の直前に戻る時、このChristmasの人間存在の特別さとは別のものが作品世界をよぎる。

Now it was still, quiet, the fecund earth now coolly suspirant. The dark was filled with the voices, myriad, out of all time that he had known, as though all the past was a flat pattern. And going on: tomorrow night, all the tomorrows, to be a part of the flat pattern, going on. He thought of that with quiet astonishment: going on, myriad, familiar, since all that had ever been was the same as all that was to be, since tomorrow to-be and had-been would be the same. Then it was time. (281)

Michael Millgateはこの引用の最後の一文について“*It is on this point of time that the entire long flashback recounting Christmas's previous experience is poised [...]*” (135-36) と述べ、Christmasの過去への没入がこの時間上の一点に支えられていたこと、従って、物語がJoanna殺害直前に戻るこの場面こそがフラッシュバックの終わりであることを鋭く示唆する。実際、第6章冒頭で彼の奥深い記憶に分け入って以来12章の終わりも近いこの場面まで、読者はフラッシュバックの閉塞感の中、奇妙に捻じれた彼の宿命の瘴気を呼吸してきた。ここまでの圧縮された過去の総体としての彼の人生の密度は、彼の存在の特別さを伝え、その重みは、Joanna殺害という行為へと彼を押し出す宿命的圧力として確かにある。しかしその一方、張り詰めた彼の人生の総体は、Christmasの驚きにも表されているように、ここで俄かにしほみ、その平坦化した模様は、単調に続いてゆく明日また明日の一樣さに組み込まれ、やがてその特別性を失ってしまうように見える。こうした見方においては、個人の悲劇がその絶対的固有性を保ち続けることは叶わない。自身に破滅をもたらす行為へ赴こうとするChristmasの背後には、無関心な世界が流転を続けているのである。

また、ここでChristmasにこうした世界の進行を思い起こさせたのが、“the fecund earth” (281) の存在であったことにも注目せねばならない。ここには、Abelが“the omnipresent muted hum of natural life” (112) と表現した、変転を続ける茫漠たる自然の相が仄めかされている。この他にも、人生初の性的体験を未遂に終わらせたChristmasが、帰宅の遅れのため厳格な養父に罰を受け、反発心を煽らせる場面では、鬱屈を抱えた無力な少年でしかない彼とは対照的に、“rich and heavy as a jasmine bloom” (158) と形容される超然と輝く宵の星や、この場面の背景を成す夏の宵の瑞々しい自然、そして“some ultimate horizon of summer” (159) の彼方で聞こえるような猟犬

の鳴き声が呼び起こす漠とした広がり描かれていた。このように作家はChristmasの物語を通じて、奇妙な人生を生きる彼の存在の背景に、悠久の自然の世界を暗示している。そうした場面における外界の自然は、人間の存在に関知しないほど広大なものである。そしてこの世界は、Christmasが自身の奇妙な運命を耐え忍んだり、それに反逆する時にも、それを与り知らず、悠然として動じない。

勿論、LAにおける自然の世界は、人間世界に対しこうした冷徹さのみを示すわけではない。そのもう一つの側面は、André Bleikastenが“Lena [...] never stands against the landscape. The natural world at peace with itself [...] is her true milieu [...]” (276) と評する、満ち足りた自然の世界と一体化した人物であるLenaに表れている。作品の冒頭と終わりて旅を続ける彼女は、LA内の登場人物達の「暗い悲劇を浄化するカタルシス役とまではいかなくとも、少なくとも彼らの魂を鎮める明るい光を提供している」(田中 215) のであり、従って彼女の姿と重なって現われる悠然とした自然の要素は、作中の登場人物達の悲劇を包み込み、和らげるものと言えるだろう。またこうした時間を超越したような大らかさの要素は、*Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958* に収録されている、“Light in August” というタイトルについて質問されたFaulknerの答えの中にも垣間見られる。彼はそれをMississippiで八月の半ば頃に見られる光のことだと答え、“[I]t came not from just today but from back in the old classic times.” (199) と述べ、それが“a luminosity older than our Christian civilization” (199) を帯びていることを説明している。そしてこのキリスト教文明以前から差してくるような光について、彼はその性質をLenaの“that pagan quality of being able to assume everything” (199) という全てを引き受ける異教的な大らかさと、“the desire for that child” (199) という母性に結び付けている。

だが、この太古から続き、これからも伸びやかに進んでゆく自然の世界の前進に加わることが出来る登場人物は、Lenaと共にJeffersonを離れるByron Bunchのみである。しかも、彼もまた自らの信じる自己像を作り上げながら、世界の無関心に曝された人物にすぎない。というのもLenaの出産後、彼は報われない恋を甘受し立ち去る克己的人物として己を捉えようとするものの、“two inescapable horizons of the implacable earth” (424) という、彼の悲劇を関知しない、冷淡で逃れようのない無情の大地の広がり直面に直面するからである。ただ、彼はそこで己の存在の卑小さを受け入れ、「悲劇を耐える人物」としての自己像を捨て、素直に元来た方を振り返る。このことで彼は、再度Lenaと子供を捨てて逃げるLucas Burchの姿を認め、その後の捨身の行動で、旅を続けるLenaの伴となることができたのである。従って、LenaとByronだけを眺めるならば、世界の中での己の無価値を思い知らされながらも行動し、変化を起こそうとする人間のみが、永遠に流転する世界の進行に連なって行く可能性を得ることができると、Faulknerは示唆しているかのように思える。実際こうしたByronの存在は、彼とは対照的な、過去の一瞬のヴィジョンを固定、永遠化することで生き長らえるしかない人物、Gail Hightowerの悲劇を痛ましいほど浮かびあがらせさえする。Byronが連なってゆくことのできる前進する世界の伸びやかさは、他方、取り残される人物にとっては、無関心な世界の無情な流転でしかないからである。

Ⅲ Gail Hightowerの開悟—人間存在の卑小さ

LA第20章で黄昏の中のHightowerは、自身の人生を沈思の中で振り返る。彼の生は、南北戦争時にJeffersonで北軍の物資を焼き払った後、民家の鶏小屋に押入った際に、その家の婦人に撃たれて死を遂げた祖父への憧れに支えられてきた。この蛮勇の賛美に没頭した彼は、牧師としては会衆に困惑と怒りを引き起こし、夫としては妻を孤独の末の自殺に追いやった。そして牧師の地位を追われた後は、「受難者」としての自己像を拠りどころに生きてきた。

このHightowerの回想に対し、LA第3章で語られる彼の過去は、町の人々の視点を通し彼を外側から眺めたものに過ぎなかった。そして第3章の終わりにおいて、“They had thundered past now and crashed silently on into the dusk [...]” (75) と、その余韻のみが描かれた、Hightowerが黄昏時に窓辺で待つものの全貌—祖父の騎馬隊のヴィジョン—は、この第20章でこそ明かされる。こうしたことから、読者はここで初めてHightowerの内面深部に入り込むことを許されるのであり、Morrisonが“heightened voice”に乏しいLA最後の三分の一の中で、“The one exception” (156) であると述べるこの第20章は、Hightowerの意識の声の集積であると言える。この“a green suspension” (468) と表現される静謐な薄明に閉ざされたHightowerの追憶は、Christmasの人生のフラッシュバックほどの迫力は無いものの、静かではあっても、やはり親密な手触りの過去の総体として提示され、その密度によって、彼の人生が特別な独自の存在であることを示唆している。

しかし、ここでのHightowerの存在の独自性はむしろ、彼に対し冷徹なまでに無関心な、茫漠たる世界を劇的に提示するためのもののように思える。というのも、祖父の騎馬隊の幻影を待ちながら自らの人生を振り返っていたHightowerは、やがて、祖父の蛮勇のヴィジョンに没頭したかつての自分こそが、妻を孤独に追いやり、自殺させたのだということに気づき、己の人生の虚ろさに思い至るからである。Hightowerはこの耐え難い自己認識の過程で、“I dont want to think this. I must not think this. I dare not think this” (490) と恐れ慄く。しかし、Hightowerの“the [...] wheel of thinking” (490) は彼の意思に反し、“the slow implacability of a mediaeval torture instrument” (490-91) という容赦のなさで進み続け、やがて彼の体を離れて空へと昇る。ここでHightowerによる制御を完全に脱した思考の車輪は、彼の意識の深層に作用する。そしてそれは、夜が忍び入る直前の、時間が停まったような穏やかな八月の黄昏の空に、“a faint glow like a halo” (491) を生じさせ、彼が今まで出会った人々の顔を浮かび上がらせる。“The faces are not shaped with suffering, not shaped with anything: not horror, pain, not even reproach. They are peaceful, as though they have escaped into an apotheosis [...]” (491) とあるように、それらの顔は穏やかなものである。さらにHightowerは、その人々の顔の一つであるChristmasの顔の底に、もう一つ別の顔が潜んでいるのを認める。それが、Christmasを惨殺したPercy Grimmのものだとわかると、Hightowerは生命が外へ流れ出し、自分が宙に上ってゆくような衝撃を受けるのである。

Hightowerを“a man who rises from the stench of selfish isolation to assert the absolute value of pity” (34) と見なすCarl Bensonは、この黄昏の空の人々の顔を“the faces of all suffering humanity” (25) とし、Hightowerが人間への共感をこめて眺めるヴィジョンであると解釈する。Bensonにとって、Byronに促されてLenaの出産を手助けし、またChristmasの死を阻止しようとしたHightowerは、祖

父の蛮勇の幻影に憑かれた孤立の生から、不完全で苦しみに満ちてはいるものの、血の通っている共生の世界へと復帰した人物なのである。

この道徳的見地からの解釈は、ある程度までは妥当な尊重すべきものと言える。しかし Hightower は 25 年もの間、妻の自殺の本当の原因に気づかなかったところか、おそらくそれに考えをめぐらせることもしなかった人物である。確かにこの小説の中で彼は何人かの人物に善意と同情を示すが、それは彼が己の世界から出て行かなくともよい、彼の自然な感情の及ぶ範囲内においてであるか、状況から必要に迫られた場合においてのみであった。彼は無邪気な憎めない人物であり、また自己中心的な人物でもあり、結局、良かれ悪かれ子供じみた人間性の持ち主なのである。それ故、Hightower が他の人間と交わり、妻を自殺に追いやった罪に思い至ったとしても、そのことで彼が急激な人間的成長を遂げたとはまでは考えにくい。むしろここに描かれているのは、彼自身に関わる痛切な認識が生じさせたヴィジョンに他ならず、他の人々への共感はその延長線上にあるに過ぎないように見える。つまり、この黄昏のヴィジョンは、妻への罪の意識の先にある、自分が外的なもの—祖父の蛮勇の幻影—に操られたに過ぎない、内実の欠落した空虚な存在でしかなかったという、戦慄の認識によって引き起こされたものなのである。

Hightower は、己の存在の無価値を思い知らされるとい痛切な経験を経て、はじめて「受難者」としての孤高の立場を失い、他の人間と同じ地平に立つことを強いられた。それは彼にとって衝撃的な出来事であり、半ば麻痺した彼の意識が見る人々の顔は、“[T]hey all look a little alike [...]” (491) と、自分も含め、皆似ている。それは各々が自分にとっては切実な欲や希望を内に秘めながらも、結局は無意味な存在に過ぎない点で、皆同じ人間の顔だからである。従って、ここで彼の思考を象徴する車輪が、旅を続ける Lena の姿に結びつく馬車の車輪と一瞬重なり、Lena から連想される八月の光が生じるのも、長年固執した自己を崩されつつある Hightower の意識が、LA の背景にある、人間の存在に無頓着に流転してゆく世界を感じつつあるからに他ならない。そして黄昏の空の中、Christmas の顔とのもつれ合いから彼を惨殺した Percy Grimm の顔が一瞬分かれ出る時、この無関心な世界はいよいよその冷たい空漠を現わすことになる。

ここで Bleikasten による、元牧師 Hightower と州兵部隊大尉 Grimm は、教会と軍隊という “a sanctuary, a refuge of purity, an antilife institution” (313) — 一人生から逃れて純粋な観念の世界を守るための逃避先— に己を閉ざした点で類似しているという指摘が重要になる。何故ならこの論を踏まえると、Hightower がここで Grimm の顔に見たものは自分自身の姿であったと考えられるからである。すると、Grimm の顔を認めて Hightower が口にした “boy” (492) という言葉は、老人の若者に対する呼び方以上の意味を帯びてくる。それは、かつて Hightower が彼の愛した祖父達の蛮勇の向こう見ずさと気まぐれさを、“schoolboys” (483) や “boys” (484) のそれに喩えていたことを思い出させる。軍人的規律への盲目的服従者であり、狂信的愛国者である Grimm を作りあげたものは、元は第一次大戦に従軍した兵士達への少年らしい憧れであった。同様に、Hightower を人間世界から隔絶した不毛な生へと追いやったものも、少年のような騎馬隊の蛮勇のヴィジョン— 正確に言うなら、それに共感する Hightower 自身の少年のような感性— であった。それぞれの出発点は無邪気と言っても良い感情であった。しかし少年のような純粋さは二人を生きた現実から乖離させ、いつしか空虚な観念性へと変容していった。そして Bleikasten が “[A] woman pays for Hightower’s fantasies with her life and [...] a man dies a dreadful death at the hands of [...] the

ignoble knight of white supremacy [Grimm].” (313) と指摘するように、人間世界の苛酷さを捨象した二人の盲目的な理想主義は、それぞれ、Hightowerの妻の自殺とJoe Christmasの惨死とを招いたのである。

結局、HightowerがGrimmを“boy”と呼ぶ時、そこには二人の類似性の認識が窺える。Christmas惨殺の場面の記憶の底から、容赦なく進む思考の車輪がHightowerに突きつけたのは、自分と同じ歪んだ少年Grimmの姿だったのである。そしてGrimmの顔が表していたものは、現実の複雑さを認識できず、人生を生きることができなかった少年のなれの果てであり、観念に触まれて内実を失った空虚な操り人形として殺人を犯した己自身の、おぞましい姿に他ならない。

こうして、これまで彼を外界から守っていた「受難者」としてのナルシスティックな自己像の壁は、“[S]ome ultimate dammed flood within him breaks and rushes away.” (492) という衝撃の中、大きく崩壊してゆく。その時、“feeling himself losing contact with earth, lighter and lighter, emptying, floating” (492) と感じた彼は、己の生命が流出、拡散するように感じている。そして彼は世界の空漠に曝される。祖父の蛮勇の幻影を信じ、その不滅の生命を理解できない人々に迫害された者としての「受難者」意識によって彼が守ってきた、特別なものとしての自己存在は—そして彼と同じように、それぞれの欲と願いを持って生きた人々の存在は—この冷たい無関心な世界に何ら顧みられない、卑小な土くれなのである。

Ⅳ 人間存在の特別さと流転する世界の無関心の相克の意味

Hightowerの追憶の形で提示された彼の人生は、その総体によって個人の存在の特別さを示す反面、世界の空漠の前で人間の存在がいかに無意味で卑小なものかを示していた。しかし、LA第20章はこれで終わりではない。世界の冷たい空漠を見て生命が流出してしまったHightowerに、祖父の蛮勇のヴィジョンが“like the crater of the world in explosion” (493) と表現される激しさで訪れるからである。“I wanted so little. I asked so little.” (492) という嘆きをもってHightowerが自己像喪失を痛感した今、ここでの騎馬隊のヴィジョンは、その生命力を理解できないJeffersonの人々に対する彼の優越を保障し、受難者意識を支えるものとしての意味合いを、最早失っている。それにも拘わらず、騎馬隊が現れる直前の文章に“*It is as though [the cavalry] had merely waited until [Hightower] could find something to pant with, to be reaffirmed in triumph and desire with, with this last left of honor and pride and life.*” (492) とあるように、このヴィジョンはやはり彼の存在の拠りどころであり続けている。確かに、迫害される受難者としての彼自身の人生は無意味なものであった。しかし彼にとってこの認識は、祖父の蛮勇の幻影そのものの価値を減ずるものでは決してない。むしろ人間存在の卑小さを痛感した彼は、英雄的な行為などではなく無意味な蛮勇であるからこそ、まさに祖父特有の少年性の結晶たり得るこのヴィジョンを、自らの支えとしなければならないのである。

実際、世界の空漠に曝されてしまったHightowerの前に立ち現れる祖父の騎馬隊の幻影は、彼を救いに駆けつけたようである。そしてその様は、死を意識したChristmasに、彼の人生が意識の深層から濃密な“voices” (105) として、死の闇に対抗するかのよう姿を現した様と似ている。ここでのヴィジョンは、人間の存在の特別さを脅かす虚無の闇に対抗するための、かつて生

きた人間が死の闇を越えて残し得たもの、Hightowerが“that fine shape of eternal youth and virginal desire” (483) と言う、鮮烈なヴィジョンに他ならない。そしてHightowerは、己を含めた全ての人間の存在の卑小さを思い知ってしまったが故に、これまでとは違う切実さで黄昏時にその訪れを待たねばならないのである。

このようにLA第20章を読み解くと、作品全体の構図におけるByronとHightowerの対照関係がより鮮明に浮かび上がる。Faulknerはこの二人を通して、自己の存在の卑小さを痛感した人間のとり得る二つの態度を描いていたのである。Byronの物語においては、存在の卑小さを認識することは他者との連帯につながった。彼はやがて彼女の子供の父親代わりとなり、また彼女と共に子孫を残し、次の世代へ伝えてゆく役割を担うだろう。その意味で彼は、自己の無価値を受け入れながら他者とつながり、己の存在を未来の人間へと伝えることで、死に縛られた個人の矮小さを乗り越えたのだと言える。彼は旅するLenaが象徴する、果てしなく前進する世界の伸びやかさに連なったのであり、彼らの旅路は、遙か太古から差し、そして遠く未来へと続いてゆく八月の光の明るさに満たされている。

一方、人間存在の卑小さの認識の後、騎馬隊のヴィジョンをかつて生きた祖父の存在の刻印として捉え直すHightowerは、あくまで個人の存在の意義に執着する。そして光の中を旅してゆくByronとは対照的に、黄昏の騎馬隊のヴィジョンが駆け抜けた後、Hightowerは漆黒の夜の闇に閉ざされる。騎馬隊のヴィジョンを呑み込み、“the night which has fully come” (493) と表現されるこの完全な暗闇は、彼らを消し去った（そして全ての個人を不可避的に消し去る）死の闇を意味するだろう。そこには、永遠の流転を続ける世界の中で、個人の存在は死を乗り越えることが出来ないという厳然たる事実がある。従って、世界の無関心を痛感しながら、なおも個人の特別性を主張しようとするHightowerは、個人を消し去る死の闇と必然的に対峙せねばならない。

しかしHightowerは、Byronと対比される虚無の闇を前にした人間の卑小さを表すだけの存在ではない。というのも、Hightowerが虚無の闇の深さを認識したからこそ、それを背景とする騎馬隊のヴィジョンは壮絶な閃光たり得るからである。彼がここで直面した虚無の闇が絶対的であればそれだけ、七十年もの昔からその闇を破って彼を訪れる、祖父の存在が焼き付けられたヴィジョンの意義はいや増さざるを得ない。そしてこのことは、この作品における作家の人間観において、固有の自己像を持つ特別な存在としての人間が、無関心な世界の冷徹さに曝され続けねばならなかったことと表裏を成すだろう。LAにおいて、登場人物が固有の過去や欲望を持ち、己の個別性を確かに主張するからこそ、それを関知しない流転する世界の無情と個人を消し去る死の闇が、暴力的とも言える絶対性を以って浮かび上がる。その一方、そうした死の絶対性が痛感されるからこそ、その闇に縛られた有限の人生の中で個人が残した生の証は、激しい輝きとして意識される。死があるからこそ、人間の生はかけがえのないものなのである。ここには、虚無の闇に脅かされた人間の存在の特別さを、その闇の認識に基づいてもう一度捉えかえそうとするFaulknerの悲壮な希求が表わされている。

Faulknerにとって、人間個人の存在が特別であることと、世界はそれに拘わらず流転し、個人はやがて死に掻き消されることは、どちらも等しく真実であった。そしてLAにおいてこの二つの大きな真実は、対置され、激しく相克することを通してそれぞれの真実性を深めている。だからこそ、祖父の蛮勇のヴィジョンの真の意義を知るためには、Hightowerは虚無の闇に打ちのめ

されなければならなかった。冷徹に流転する世界の中で人間個人の存在の特別性を主張せんとする彼は、自ら虚無に貫かれ、その暗闇に閉ざされるという代償によってのみ、闇の中に走る一瞬の閃光を認め得るのである。

注

※本論は中・四国アメリカ文学会平成18年度春季研究会（広島経済大学、2007年3月10日）において口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。

- 1 本論はAbelのLAの捉え方に示唆を受けつつ、それを幾分ずらして議論に組み込んでいる。Abelは“The stories of Lena Grove and Joe Christmas constitute the “legend” [. . .] seen against the immutable image of eternity.” (111) とし、Lenaもレリーフ上の個人の領域に属すると捉えている。本論は彼女が属するのは個人の領域ではなく、背景の永遠の流転の領域であると捉える。

引用文献

- Abel, Darrel. “Frozen Movement in *Light in August*.” *Boston University Studies in English* 3 (1957): 32-44. Rpt. in Pitavy 109-22.
- Benson, Carl. “Thematic Design in *Light in August*.” *South Atlantic Quarterly* 53 (1954): 540-55. Rpt. in Pitavy 19-34.
- Bleikasten, André. *The Ink of Melancholy: Faulkner's Novels from The Sound and the Fury to Light in August*. Bloomington: Indiana UP, 1990.
- Faulkner, William. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*. Ed. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner. Charlottesville: U of Virginia P, 1959.
- . *Light in August*. New York: Vintage-Random, 1990.
- Millgate, Michael. *The Achievement of William Faulkner*. New York: Random, 1966.
- Morrison, Kristin. “Faulkner's Joe Christmas: Character through Voice.” *Texas Studies in Literature and Language* 11 (1961): 419-43. Rpt. in Pitavy 143-69.
- Pitavy, François L., ed. *William Faulkner's Light in August: A Critical Casebook*. New York: Garland, 1982.
- Reed, Joseph W., Jr. *Faulkner's Narrative*. New Haven: Yale UP, 1973.
- 田中久男. 【ウィリアム・フォークナーの世界—自己増殖のタペストリー】. 南雲堂, 1997.

The Conflict between the Preciousness of Human Existence and the Detachment of the Universe Eternally in Flux in *Light in August*

HONDA Ryohei

In this essay I discuss the conflict between the preciousness of human existence and the detachment of the universe eternally in flux in William Faulkner's *Light in August*. While each of the main characters in the novel assumes the uniqueness of his being in clinging to his own self-image, they all seem anonymous when set against what Darrel Abel calls "eternity" (111) —the vastness of the universe which is constantly changing.

This sense of the preciousness of human existence is developed in the novel, for the most part, by the long flashback of Joe Christmas' life in what Kristin Morrison calls the "heightened voice" (150) of his mind: the looming voices within him which constitute the memory of his life heightened in volume and expression. His life is felt as a coherent entity in which the accumulated weight of his past irresistibly determines his present. This sense of coherence of Christmas' life is the endorsement of his selfhood he unconsciously cherishes and it makes the reader feel that Christmas' life is something precious. It is also remarkable how the sum of "voices" (105) in Christmas first surges up as if, threatened with the nothingness of death, his whole life were summoned up to confront it resistingly.

But the preciousness of his life is dwarfed by the ruthless continuance of the universe. In the novel, the embodiment of the universe's detachment from human existence is the natural world; whenever Christmas struggles against his grim fate, it is contrastingly vast and serene. The only character who can take part in the progress of the universe is Byron Bunch, because he can accept the trivialness of his being and then take action.

The sense of individual preciousness and that of human trivialness are very intense and are contrasted with each other most vividly in chapter 20. Here, the life of Gail Hightower is represented, like that of Christmas, as a store of memories and thus felt as a closed entity. For this reason, the way in which his life drains out of him and into the universal void is all the more overwhelming.

As for the vision of the faces Hightower sees in the twilight sky, it is contended in this essay that the trigger for it is his horrifying realization of the sheer emptiness of his own existence. Through this realization, Hightower is forced to give up the aloofness of martyrdom he carries and share with others the meaninglessness and fragility of existence. Fatal self-recognition then comes to Hightower, with the surfacing of the face of Percy Grimm, his double: they are both grotesque "boy[s]" (492) who, shutting themselves up in lifeless "purity" (Bleikasten 313), could not live their lives and have become murderers. His illusion of himself as a martyr now shattered, he is vulnerable to the cruel nothingness of the universe.

The vision of the galloping cavalry to which his grandfather belonged then comes sweeping past. This

*Light in August*における人間存在の特別さと流転する世界の無関心との相克

vision appears here as defiance towards the nothingness of death. Because of Hightower's awareness of the darkness of nothingness, the preciousness of this vision in which his grandfather's being is embalmed is highlighted all the more. And the conflict between the preciousness of the human being and the devastating nothingness dramatized here in Hightower's mind is the reflection of Faulkner's view on the significance of human existence.

転覆する階層関係

——Louisa May Alcottの*Under the Lilacs*におけるサーカス表象——

本岡 亜沙子

序

Louisa May Alcott (1832-88) の *Under the Lilacs* (1878) は、表面的には、サーカス出身の少年 Ben Brown がテント外の世界の住人と交流を深める物語である。先行研究を概観すると、本作品に漂う過度のロマン主義的風潮 (Clark 322)、たとえば子どもの善性や大人の恋愛沙汰を酷評するものが大半を占める (Eiselein and Phillips 336)。しかし、批評家 Hugh McElaney は、本作品にオールコットのジェンダー問題に対する視点を認めることにより、従来の論調を一転させる論を展開した。彼は、オールコットが当時流行していたサーカスの“freak show”に登場するような身体的・性的障害を負った少年たちを描いた理由を、彼らの損傷した男性性を読者に印象づけ、フェミニズム運動の起爆剤の一つにすることにあつた (156-57)、と結論づけた。

しかし、「ライラック」に内在する問題は、ジェンダー問題にとどまらない。事実、本作品においては、奇形ショー、道化馬の動物ショー、パントマイム、 minstrel・ショーなど、種々雑多なショーが繰り広げられる。また、ベンとその相棒 Sancho の来訪を機に、舞台となる町全体がサーカスのリングに、そして町民が団員もしくは観客へと変容し、既存の階級関係は転覆される。本稿の目的は、この過程において、サーカスの持つ価値転覆機能がいかに貢献しているかを論証し、さらには物語の背後に存在する人種問題・階級問題に対するオールコットの批判的態度を炙り出すことにある。

I 転覆をもたらす魅惑機構サーカス

アメリカ社会は、サーカスに対し、歓迎と排除の相反する態度を示した。それはサーカスの持つ、支配の道具であると同時に価値転覆の道具でもあるという、相反する二面性と関わっている。

1 サーカスへのアンビヴァレントな感情

サーカスが非日常的時間と空間を提供してくれるがゆえに人々を惹きつけるのは、今も昔も変わりがない。19世紀後半、特に黄金時代と呼ばれる 1870年代から 1920年代にかけて、アメリカのサーカスは大衆娯楽の首位の立場に躍り出た。それは、“The bigger, the better.” という考えを金科玉条のごとく信奉した結果、サーカスが数・規模・範囲ともに飛躍的に成長したことからも明らかである。たとえば、全米のサーカス団体数は、最高点に達した 1903年の98団体に向けて、1860年代以降、年々増加の一途をたどる (Davis 6)。また舞台装置も、1リングから3リング

サーカスへと大規模なものに変化する。さらに、大陸横断鉄道の敷設に伴い、移動可能範囲が飛躍的に広がる。¹ 確かに、団体の規模の大小も考慮すべきであるが、98ものサーカス団が全米中を巡回する光景は、いかにサーカスが人々に受容されてきたかを裏付ける。

『ライラック』においては、町民たちのサーカスへの並外れた興味や興奮は、サーカス団 "Van Amburg [sic] & Co.'s New Great Golden Menagerie Circus and Colosseum" (*Lilacs* 115) が隣町を巡回したときの、子どもたちの様子に如実に現れる。² 平凡な町ではたとえ2セントさえも使いたくないと語っていた彼らが、サーカスが来るとなると態度を一変させ、入場料25セントを借し気もなく支払う。³ また、周辺の町一体を巻き込むサーカスの渦の大きさは、公演途中でとどろく雷鳴に驚き、一目散に帰宅する観客の多さや、彼らが手にする傘でごった返す入場門付近の様子に顕著に現れている。

一方で、サーカス団員たちは、社会不適合者として社会的抑圧を受け排除された。その第一の理由は、下層階級に対する根深い社会的偏見であった。大半の団員は、一攫千金や足かせの多い共同体生活からの逃亡を夢見て入団した下層階級出身者であった。また、地方巡業を繰り返す団員たちは、世間から、ホームレスもしくは "gypsies" (Davis 30) と同類視されていたのである。事実、1870年代の人々には、放浪癖は "normality" (Cresswell 115) から著しく逸脱した振る舞いと見なされていた。

信仰と勤勉を信条とする宗教人の中には、道徳的見地から、公然とサーカス団員への非難攻撃を行った者もいた。1830年代から19世紀末にかけて、宗教人たちは、サーカス団員の不道徳な性質や放浪生活の悪弊を子どもたちに伝えていた (Bogdan 78)。デイヴィスが "[C]arnivals can become riots. ..." (29) と言っているように、サーカス・デーは諸社会問題を誘発する危険性を有していた。なぜなら、サーカスを開催すると、テントや露店の連なる雑踏と騒音の中に、元犯罪者、ごろつき、暇を持て余した10代の少女、家出少年少女、極貧者が紛れ込み、誘拐事件、暴力事件、売春事件などの犯罪が多発する傾向があったからである。このように、サーカス・デーは、テント、もしくは退場門を境界線に、娯楽と犯罪が均衡関係を保つ非常に独特な空間を生み出す日と化した。だからこそ人々は、法律という強制手段を武器に、強烈な防衛反応をサーカス団体に示したのである。州によっては、反サーカス運動が法規制にまで発展する場合もあった。18世紀に制定された演劇禁止令を持ち出してサーカスを規制しようとする州や、コネチカット州・バーモント州・マサチューセッツ州などのように、サーカス団体の出入を全面禁止する法を発動する州もあった (Day 10)。

サーカスを法規制するに及んだ理由には、サーカス団体一開催地間の経済的要因も絡んでいた。町に突然やってきて大々的な興行を行い、チケット代という形で町全体の資金を収奪して突然消えていくサーカスは、デイによると、言わば "highway robbery" (10) を行う存在であった。平穏な町にどこからともなく突然やって来て、町の人々を一時的な興奮状態に陥れ、虎の子の大金をはき出させていくサーカスは、その興奮が去った後では、やはり「正常」から逸脱した存在であったのである。

サーカスが人々の反感を買ったさらなる理由は、サーカス集団が内包する価値転覆機能と密接に関係している。

2 サーカスの相反する機能

サーカスには、人種や階級に関する既存の価値体系を温存・固定し、既存の支配／非支配の関係を維持する機能と、それを転覆させる機能との相反する機能が共存する。

19世紀中葉から後半にかけて、馬芸中心のサーカスは、資本家的興行主 Phineas Taylor Barnum (1810-91) に代表される商業サーカスへ変化を遂げた。この変化により、総演目の四分之三を占めていた馬芸は四分の一に激減し（クズネツォフ 378）、代わって人種問題や階級問題に根ざした特徴を際立たせる演目が台頭する。特に、“human menagerie” という別名を持つ奇形ショーでは、“physically or mentally disabled, natives from non-Western countries, and persons with unusual talents” (Adams 26) を含む社会不適合者がひとところに集結しているがゆえに、アメリカ社会の差別が凝縮した形で反映された。奇形は、動物との境界線が曖昧な、ある種、グロテスクな下等動物として観客の目にさらされた。また黒人は、リングに原始的で異国情緒豊かな雰囲気を出すために、象の調教師として登場した（クズネツォフ 329）。さらに、19世紀後半から人気を博す“Wild West Show”には、いわゆる「インディアン」やフロンティア生活の再現という名目のもと、高貴なる身分を失墜した野蛮人としてアメリカ先住民の酋長が登場した（Sutton 48）。このように、サーカスの場は、見る／見られるという形態によって、アメリカ社会内に遍在する偏見や固定観念を観客に無意識に植え付け固定するという点で、人種・階級を軸とした既存の支配／非支配の関係を維持するための道具として機能を果たす。

しかし同時に、サーカスという組織には、既存の価値体系や支配体系を転覆させる機能もあることに留意すべきである。この転覆機能を顕在化させたのは、奇しくも奇形ショーの団員たちであった。彼らは、社会から侮蔑的視線を注がれる自分たちの体を、意識的に見せ物として利用することで興行的成功を目指した。団員が自分の体を金儲けの道具に利用したことは、太った大女“Jolly Dolly Dimples”の言葉、“My fat is my kingdom, my riches.” (Davis 26) に率直に表れている。事実、1892年の銀行の経理担当者が週給16.63ドルであったのに対して（66）、犬顔をした“Jo-Jo”は、1886年に週給500ドル（Hartzman 52）、そして、世界一大足な少女 Fanny Mills (1866-99) は1886年に週給150ドルを稼ぎ出した（68）。このように、外部社会から差別を受ける対象たる自分たちの異常を逆手に取った社会不適合者が、社会的エリート層の10倍以上の収入を荒稼ぎするという異常な現実がサーカス内部では起こった。嘲笑の対象であり且つ階層の下位者が、嘲笑の主体であり且つ階層の上位者を収入において上回るという事態は、後者の前者に対する嫌悪感や不快感を強烈に増幅させる。つまり、一般の人々は、差別される団員が社会的成功者になることを潜在的に許さず、あくまで嘲笑すべき娯楽提供者、すなわち道化の存在で居続けることを求める。それゆえ彼らは、最下層に位置するはずの社会的不成功者よりも、自分たちが金銭的劣位に位置する現実を直視したくないがために、一層サーカスを社会から排除していくようになるのである。

しかし、サーカスの持つ価値・社会階層の転覆作用は、実は、サーカスの観客からは隠されたところで機能している。外界から隔離された場としてのサーカスのリングは、一般社会の常識や慣習にとらわれていない“vacuum” (Bouissac 81)、あるいは“void” (92) な存在である団員（特に道化）が、“pre-industrial, slow, bumbling, naïve, or ‘savage’” (Davis 26) な人物に変身し、観客を優越感に浸らせる。その結果、観客は、見る／見られるという関係において、自己の階層上の優位

性を確認する。しかし同時に、見せる／見せられるという関係において、団員と観客との階層関係は逆転している。なぜなら団員は、観客に気づかれぬよう、この逆転作用を注意深く仕掛けているからである。このように、サーカスの場では、支配／非支配の関係が抗いようもなく転覆される。

以上、1903年には98のサーカス団体が全米を駆け回っていた史実からも分かるように、一部例外はあるものの、圧倒的多数の人々はサーカスを受容していた。人々は、商業的成功のために自らの体を対象物に自己演出するという、サーカス内部に存在する価値転覆機能のからくりに見事にはめられ、団員を嘲笑するためにお金を払い、サーカスのさらなる発展に無意識のうちに貢献していたのである。

Ⅱ サーカス団員と社会階層

では、『ライラック』において、サーカス団員、特にベンと町民との階層関係はどのように表象されているであろうか。

『ライラック』の町民たちのサーカスに対する熱狂は、先に示したとおりである。他方、ベンとサンチョのような、間近で演技を披露してくれる巡回演芸人に対しても、人々は強い関心を抱く。たとえば、ベンが Moss 家にある洗濯バサミで皿を数枚挟み、顎や鼻、額に乗せて歩き始めたとき、モス家の人々は、“The children [of the Mosses] were immensely tickled, and Mrs. Moss was so amused she would have lent her best soup tureen if he [Ben] had expressed a wish for it.” (23) と、一家総出で歓喜する。人々の身近にある家庭用品をサーカスの小道具へ変容させ、彼らの日常生活を非日常的世界へ作り替えるベンは、賞賛を浴びる。

しかし、この賞賛は長続きしない。なぜなら、サーカスの放つ華麗で電撃的效果は、そもそも限定された時間や空間の中で行われるからこそ有効なのであって、永続するものではないからである。サーカスが、テント内のみに通用する一過性の娯楽であることは、先述したファン・アンブルフのサーカスから帰宅する、モス家の長女 Bab の様子からも明らかである。鑑賞後、会場を離れた彼女は、たちまち、片道4マイルを歩く疲労感や、会場で購入したポップコーンやピーナッツへの食欲減退、心配する母親と再会することへの不安など、さまざまな現実に引き戻される。また、その興奮めは、公演中の豪雨がにわか雨へ変化するなど、彼女を取り巻く風景描写にも見事に表象されている。

ベン自身も、“I’ve found out that folks don’t think much of circus riders, though they like to go and see ‘em.” (83) というように、サーカスの限界を痛感する。この結論に至った経緯は、“Some of the children rather looked down upon him, called him ‘tramp’ and ‘beggar,’ twitted him with having been a circus boy and lived in a tent like a gypsy.” (197) と、ベンが一般社会から社会不適合者と見なされ、町民から無下な扱いを受けたことにある。すなわち、ジプシーに対してと同様、サーカス団員への典型的な偏見ゆえに、彼は下層階級出身者と判断され、町民の差別意識の犠牲者となる。具体的には、馬車置き場に不審者の気配を感じたモス夫人は、小屋の中にいるベンを凝視し、“a bundle of rags” (16)、すなわち非人間的でゴミ同然のモノだと勘違いする。また町民の金が行方不明になったとき、物乞いの習性がありそうな元浮浪者で、動作の俊敏なサーカス経験者である

ことを理由に、ベンが真っ先に犯人扱いされるだけでなく、彼の行動を探偵する者も出る。さらに地主も、面接時、“perfectly transparent” (34) とベンが意識するほど彼のことをしげしげと見たあげく、彼を泥棒か浮浪者だと判断し、アイルランド人の召使 Pat の手下に配置する。

確かに、ベンの姓がブラウンであり、たびたび彼の人種的アイデンティティが黒髪や茶色の肌に表象されていることを考慮すれば、彼自身、非白人である可能性もある。しかし同時に、われわれは、19世紀後期、アイルランド系移民が“white niggers” (Litwack 164) と見なされ、黒人と同列、ときには黒人より劣位に置かれる傾向があったことにも注意を払うべきである。⁴ アイルランド人は、英米両国の漫画家から“creatures with gorilla-like bodies and simian faces” (Turner 63) に風刺して描かれた。当時の人種観と呼応するように、オールコット自身も、蛇蝎のごとく忌み嫌われるアイルランド人を、作品中で黒人よりも人種的劣等種として描くことがあった。「ライラック」においては、1845-49年にアイルランドで起きたジャガイモ飢饉を連想させる、“potato pantomime as a sideshow” (219) が描写される。不慮の事故とはいえ、顔が描かれたジャガイモが落下し、真っ二つに分裂したことを、“first-rate fun” (221) と観客が笑い飛ばす場面は、極めて人種差別的な意味合いを含む。となれば、パットに従属するベンの状況や、その主客転倒した主従関係に矛盾を感じたり異論を唱えたりする住民が皆無であった事実から、ベンの人種的アイデンティティは白人／非白人にかかわることなく、町全体から最下層の人間と烙印を押されたも同然であることは疑いない。

さらに特筆すべきは、ベンが住民の“an object of interest” (103) となる結果、動物と比較され、嘲笑される傾向が著しいことである。人間—下等動物間の曖昧性は、デイヴィスが“The circus, with humanized animals and animalized humans, highlighted this ambiguity of modern people’s position within the natural world” (152) と言及しているように、サーカスに頻出する珍現象である。住民は、地主の次にベンの雇用を引き受ける上流階級の淑女 Celia の使いをするためであれば、どれほど悪天候であっても馬を疾駆させるベンの“antics” (*Lilacs* 103) を鼻でせせら笑う。この馬を駆る彼の姿は、老若、雄雌、緩急という点において、町のもう一つの見世物である、老齢ゆえに自由の利かない地主の老馬と対極をなす。なぜなら、後者の風変わりな足並みを詳説すると、前足は高く上げギャロップする体勢をとるが、後ろ足は地面に着け並足する格好のままという、疾走しそうでしない（できない）姿をしているからである (35)。ベンの奇行の対称物に馬の奇行が挙がるということは、マケラニーも“he [Ben] is . . . not quite human.” (144) と強調しているように、彼が動物と同一視、少なくとも下等動物の近接種と推断されていることを意味する。

さらにベンは、サンチョよりも下等に扱われる。プーイサックの“the humanization of animals” (116) 分析を見ると、たとえば“educated horse” (52) は、ほかの馬からも区別されるだけでなく、自然言語の知識を持つことで人間と対等、もしくは人間より文化的に優越した存在となるという、二重の分離を経験する。それならば、文字判別ができ、倒立姿勢で歩行し、“a sentinel on guard” (*Lilacs* 9) のように規律正しく歩き、ふさふさした尻尾を口にくわえて上流階級気取りで社交界のワルツを踊るサンチョは、ほかの犬に対してだけではなく、無教養・奔放・無骨というレッテルを貼られるベンと比較しても、文化的に秀出していることになる。⁵ それに対し、馬芸サーカス時代は花形であっても、商業サーカスへの移行にあたり、象の体や馬の頭に乗るなどの大技に対応し切れなかったベンは、団員としても、成功を取める学者犬サンチョ以下の待遇を受

けていた。

以上のように、アイルランド人パットよりも、さらに動物サンチョよりも劣位に置かれている点で、ベンの社会的地位とは、限りなく下等動物に近い、もしくは下等動物と同属なのである。換言すれば、『ライラック』のベンは、社会内においては社会不適合者の典型例として、そして、サーカス内においては収益に貢献することの少ない穀潰し・役立たずの典型例として人物設定されているのである。

Ⅲ 階層関係の転覆

しかし同時に、ベンが自覚的に社会階層の劣位に身を投じていたことにも留意すべきである。たとえば彼は、パットをリーダーと仰ぎ見る演技をし、自分の環境適応力や従順性を地主に示すことにより、自分のプライドより就職先を確保することを優先する。さらにベンは、飛び抜けて観客受けの良い実績を持つサンチョの演技を前面に押し出すことで、モス家の人々の関心を引こうと冷静に判断する。この演技を披露した目的が、単なる観客への娯楽提供ではなく、宿泊交渉であったことを考慮するならば、ベンの至った自己犠牲的な心理作戦は至極当然なものなのである。これらの事実、パットやサンチョの上位性が、ベンに一種依存する形で保持されていることを示している。そこで本章では、サーカス団員間の階層関係のみならず、ベンと町民との差別／被差別あるいは支配／被支配という上下関係を、サーカスの転覆機能を軸に再追究する。

まず、ベン自身の語り（口上）がサンチョの優等性を助長させていることを確認する。聾啞学校教師で奇術師でもあるフランス人の忠犬と比較すると、サンチョの演技の幅は圧倒的に狭いにもかかわらず、ベンは相も変わらず後者を“the best trick dog” (28) や “a very valuable dog” (28) と誉めちぎる。⁹ またベンは、“I can't do half the tricks, but I'm goin' to learn when father comes back” (69-70) と、知的レヴェルに関しても、自分よりもサンチョの方が一枚上手だとたびたび指摘する。つまり彼は、自らの生物的優等種=ヒトというアイデンティティを自発的に否定することで、サンチョの引き立て役を自己演出しているのである。

また、父親の死亡報告を受けたベンが、その翌日から喪服を着てサンチョと共に弔い行列をする場面も注目に値する。喪服といっても、ベンの場合、服はある程度まともなもの、その喪章付きの帽子は“cracking mournfully” (80) で、サンチョにはベンのズボンにねじった首輪がつけられる。この姿が町民の興味の対象となったのは言うまでもない。しかし、特筆すべきは、ベンがこの行事を父への敬愛を表す場として自己演出していることである。

It was a real sacrifice of boyish vanity to take the blue ribbon with its silver anchors off the new hat, and replace it with the dingy black band from the old one; but Ben was quite sincere in doing this, though doubtless his theatrical life made him think of the effect more than other lads would have done. (79-80)

このように、町民が嘲笑したベンの弔い行列の裏側には、サーカス団員時代の経験を持つ彼だからこそ計算できた演出効果があった。彼は、喪主としての使命感があるからこそ、たとえ古着を観客から小馬鹿にされる犠牲を払ってでも、喪服に近い衣装を身にまとうことで自身の悲傷を他見に供する行為に及んだのである。そして、反社会的集団と捉えられていたサーカス団員が、

型にはまった行動を取ってみせることで、儀式に注目させようとするベンのからくり、町民は見事にはまる。従ってこの葬儀は、差別を受けていた者（ベン）が、差別している者（町民）を支配するという、従来の階層関係に逆転現象をもたらすものだったのである。別の見地からすると、葬儀は、サーカス団員に対し社会的偏見を持った人々に及ぼす心理作用を計算した、演出家ベンの一面をのぞかせてもいる。

喪儀を興行化する傾向は実社会にもあった。たとえば、George Washington (1732-99) の161歳の乳母と銘打ち、バーナムを一躍有名人に押し上げた、しわだらけの黒人女性 Joice Heth (1756?-1836) の葬儀である。バーナムは、外科医の David L. Roger に、入場料 50 セントを取った1,500人を超す見物客の目の前でヘスの死体を解剖させた (Reiss 2-3)。

サーカスと葬儀の緊密関係は、『ライラック』の最終章、シリアの新婚旅行後の歓迎会の場面にも登場する。まず、シリアとベンの関係について確認しておく、両者は孤児という共通点を持つ。しかし、祖父が残した財産と屋敷を持つシリアと無一文のベンとの間には、歴然たる階級差が存在する。また、両者が雇用関係を結ぶことで、資本家—労働者という、より明瞭な支配—被支配関係が顕在化する (Nelson 39)。⁷ 今回の歓迎会の準備も、シリアから受けた仕事の一つである。しかし、ここで特筆すべきは、バーナムのごとく、ベンが歓迎会を見世物化された葬式へと演出していくことである。そして彼は、その演出過程で、さまざまなサーカス表象に死のイメージを付着させる。たとえば彼は、大門付近を、“a lavish display, suggesting several Fourth of Julys rolled into one” (*Lilacs* 256) とあるように、花や旗で飾り立てることで、サーカスの入場門にする。この入場門に付随する死の予兆は、シリアが伴侶の引越しまで開放することを断固拒否していた大門に、サンチョが一番乗りをする場面から始まる。このとき彼は、鍵穴に絡みついた“dead mullein” (256) を引きちぎり、屋敷内に引きずり入れる。彼が、死体を引きずるかのよう、枯葉という死物を屋敷の敷地内に入れたことは、その敷地内に住む人間の死を、少なくとも屋敷内の住人が死と隣り合わせの生活を送ることを読者に強烈に意識させる。

さらに屋敷は、長期間未使用の煙突が掃除をせぬまま点火されたため、“illumination” (258) が付き、煙突からは“a bonfire” (257) が打ち上げられる。この屋敷＝リングに発生した花火ならぬ火災によって、歓迎会は“mourning” (256) や“ashes” (256) に変化する。それゆえ、黒焦げとなった煙突や天井、さらに、消火活動に関わった町民たちの煤まみれの顔など、屋敷内は黒色のイメージに染められる。これらの死のイメージを念頭に置くと、大門に飾られた花輪が供花に、町民が着々と進行したものが歓迎会の準備ではなく、シリアの死に支度であったと言っても過言ではなくなってくる。そして、この事実は、日頃ベンをさげすんでいる人々が、無自覚にも彼の言いなりになっていることを表す。特に、“Three cheers for the bride!” (262) というベンの号令とともに入場門をくぐるシリアは、彼の演出によって、まだ煙の立ち昇る危険地帯にあえて侵入する姿を観客に注視される道化役に設定されている。しかも、黒一色の屋敷に入る彼女は、ミントレル・ショーの白人道化と化すことを予告されているのである。

確かにベンは、シリアの言付けによって、歓迎会の準備を開始する。しかし彼は、彼女の屋敷をサーカスリングに改造することで、彼女を道化の一員に組み込む。このように、道化であったはずのベンが実は葬儀の仕掛け人で、上流階級であったはずのシリアが道化になるという、両者の社会的地位の逆転現象は、サーカスに内在する価値転覆作用が機能した証拠なのである。

結論

オールコットは、『ライラック』において、孤児問題・階級問題・人種問題などを直接的に描くことはせず、家庭小説というロマン主義的ヴェールをかけた上で、その階級・人種上の上下関係あるいは支配関係を、サーカスにおける団員間あるいは団員と町民との関係に代理させていた。そうすることで彼女は、サーカスに内在する転覆力を、階級・人種的階層関係における高低や優劣などの「常識」の転覆に応用することを意図していたのである。この点からすると、上流階級のシリア／下層階級のベンなどの序列関係の転覆を描いた本作品は、当時遍在していた階級問題や人種問題を映し出す反射鏡であるにとどまらず、実社会の差別的階級社会に批判的眼差しを向ける作品でもあるといえるだろう。

Notes

- 1) 黄金時代のサーカスの特徴については Davis 10-11、クズネツォフ367-80参照。
- 2) 1877年6月3日、オールコット自身も『ライラック』の情報収集のためにファン・アンプルフのサーカスを見に行っている (Myerson and Shealy 223)。
- 3) 入場料25セントは、ベンが地主から支払われる週給と同額である。
- 4) “Black Irish” という用語は、*OED* によると、黒髪や黒眼が特徴的な “Irish of Mediterranean appearance” と定義されている。しかし、19世紀では、ときにアイルランド人が “intermixing with shipwrecked slaves” (Roediger 4) した結果起こる “a mixed black/white heritage” (Tate 4) を指すこともある。
- 5) サーカス以外の場でも、サンチヨは歩行練習を始めた身体障害者でシリアの弟である Thornton の車椅子に座ったり、人間の心を読み取る “dumb affections” (28) を持っていたりと、動物と人間の混合物として描かれる場面がある。
- 6) サンチヨは、アンプルフサーカスの見物中、他サーカス団の団員に誘拐される。誘拐先のサーカス団でサンチヨに付いた芸名がベテランに用いる “Generale” (147) であったことからすると、彼の技能は花形になるには充分だと見込まれたことは想像に難くない。
- 7) ベンのシリアに対する敬意は、彼が歓迎会用に作成した2種類の旗を比較すると歴然となる。一方の “Father has come!” (257) という伝言付きの旗が15センチばかりの小さなポロ旗であり、もう一方の “Welcome Home!” (261) というシリアに向けた旗は金色に輝く豪華な大旗であった。この差異は、シリアの力・存在が絶大なあまり、父親を無下に扱う彼の心理状態を露呈している。

Works Cited

- Adams, Rachel. *Sideshow U. S. A.: Freaks and the American Culture Imagination*. Chicago: U of Chicago P, 2001.
- Alcott, Louisa May. *Under the Lilacs*. Boston: Little, 1928.

- Bogdan, Robert. *Freak Show: Presenting Human Oddities for Amusement and Profit*. 1988. Chicago: U of Chicago P, 1990.
- Bouissac, Paul. *Circus and Culture: A Semiotic Approach*. Bloomington: Indiana UP, 1976.
- Clark, Beverly Lyon, ed. *Louisa May Alcott: The Contemporary Reviews*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Cresswell, Tim. *The Tramp in America*. London: Reaktion, 2001.
- Davis, Janet M. *The Circus Age: Culture and Society under the American Big Top*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2002.
- Day, Charles H. "The American Circus under the Ban." *Washington Post* 20 Jan. 1907: SM10.
- Eiselein, Gregory, and Anne K. Phillips, eds. *The Louisa May Alcott Encyclopedia*. Westport: Greenwood, 2001.
- Hartzman, Marc. *American Sideshow: An Encyclopedia of History's Most Wondrous and Curiously Strange Performers*. New York: Jeremy P. Tarcher, 2006.
- "Irish." Def. B1a. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- Litwack, Leon F. *North of Slavery: The Negro in the Free States, 1790-1860*. Chicago: U of Chicago P, 1961.
- McElaney, Hugh. "Alcott's Freaking of Boyhood: The Perplex of Gender and Disability in *Under the Lilacs*." *Children's Literature* 34 (2006): 139-60.
- Myerson, Joel, and Daniel Shealy, eds. *The Selected Letters of Louisa May Alcott*. Athens: U of Georgia P, 1995.
- Nelson, Claudia. *Little Strangers: Portrayals of Adoption and Foster Care in America, 1850-1920*. Bloomington: Indiana UP, 2003.
- Roediger, David R. *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*. London: Verso, 1992.
- Tate, Claudia. *Psychoanalysis and Black Novels: Desire and the Protocols of Race*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Turner, James. *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian Mind*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.
- クズネツォフ、エヴゲニイ 「サーカス——起源・発生・展望」 桑野隆訳、ありな書房、2006年。

A Subversion of Hierarchical Systems:
Circus Representations in Louisa May Alcott's *Under the Lilacs*

MOTOHKA Asako

In *Under the Lilacs* (1878), Louisa May Alcott outwardly depicts a friendship between townspeople and two former circus performers, Ben Brown and his dog, Sancho. Soon after their visit, a town changes into a circus ring where various circus events, such as a freak show, an animal show, a pantomime, and a minstrel show, are held continuously, and the townspeople change into performers/spectators. The aim of this paper is to clarify Alcott's subversion of the existing social hierarchy in terms of the relation between circus performers and regular townspeople, and to reveal her objections to the classism and racism of those days.

American society of the late nineteenth century enthusiastically welcomed the circus as entertainment. On the other hand, circus performers were discriminated against as social outsiders, like the homeless, the gypsy, and the reprobate. The "freak show," also known as the "human menagerie," illustrates people's typically ambivalent feelings toward the circus. Physically or mentally disabled people and non-whites are exposed to public view as freaks, half man and half beast. It is, however, noteworthy that the performers cleverly and fully exploit their own bodies, the low-status objects of contempt, as commercial products and keys to pecuniary success. In other words, they make use of their socially allotted lower-class status to give audiences a feeling of superiority. Through the moneymaking strategy of the performers, the spectators, who are entrapped in the subversive function of the circus, unknowingly contribute to its success.

In *Lilacs*, townspeople (spectators) stare fixedly at Ben (a clown), and regard him as an inferior, similar to a tramp, a gypsy, a thief, one of the Irish who at that time were utterly despised as "white niggers" (Litwack 164), or even an animal. Ben is thus stigmatized as the lowest of the low by the townspeople.

However, it is worthy of attention that Ben actually degrades himself to a lower position to take advantage of his situation. He wears ragged mourning clothes and leads a solemn funeral procession to gain the public's sympathy. More importantly, he stages a funeral for his employer, Celia, and makes her change into a clown. Through the dramatic deathbed ritual, Ben forces her out of her ruling position.

Alcott uses the concept of the circus subversively not only to overturn the accepted ideas of the social hierarchy but also to object to the classism and racism of her time.

中・四国アメリカ文学会第36回大会シンポジウム 「メルヴィルとポストコロニアリズム」

まえがき

藤江 啓子

アフリカやインド、カリブ、南太平洋等旧植民地出身の作家たちの活躍によっていわゆるポストコロニアルの文学が近年注目されるようになってきた。それとともにポストコロニアリズムが、グローバリゼーションやかつてはイギリスの植民地ではあったが今や軍事的、経済的「帝国」と変貌したアメリカを考える一つのキー・ワードとなっている。こうした傾向にあって19世紀半ばに世界を航海したハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819-91）はすでにグローバルな視座で世界と自国アメリカを見つめていたといえる。

とりわけ1841年から1844年にかけての、ガラパゴス諸島、リマ、リオ・デ・ジャネイロ、ハワイ諸島、タヒチそしてマルケサス諸島方面への旅はヨーロッパの諸帝国によって植民地化された、あるいは植民地化される寸前の地域へメルヴィルの目を向けた。なかでもマルケサス諸島のヌクヒバはフランスの領有となる寸前であり、キリスト教宣教師による宣教活動は横溢を極めていた。そこで過ごした4週間を素材にしたのが、デビュー作『タイピー』（*Typee*, 1846）である。そのためメルヴィルは「食人種のあいだで暮らした人」として人気を得ることとなった。ところが一方、カニバリズムを野蛮とする言説に対しては、「熱狂的な文明の汚れた雰囲気から出てきたあらゆる種類の悪徳、残虐、そして犯罪行為」（*Typee*, 125）こそより野蛮であると、メルヴィルは西洋文明を批判する。西洋近代のもたらす植民地主義、経済的搾取、名ばかりのキリスト教への改宗に対するメルヴィルの批判精神は南海方面への旅によって培われ、その旅を素材とした作品によく表れているといえる。また、晩年の詩のなかにも例えば「ネッドへ」（*To Ned*）、「多島海」（*The Archepalago*）、「うらやましき島々」（*The Envidable Isles*）、「聖なる煙草」（*Herba Santa*）等のように若き水夫時代を懐かしんで書かれたものがある。これらの詩においても西洋近代が批判され、西洋植民地主義の餌食になる以前の南海が忍ばれている。さらに南海の原住民は、アメリカ国内にあってイギリス人移住者によって植民化された先住民に重ね合わせて考えられている。

メルヴィルはそれ以前の1839年には、貨物船セント・ローレンス号に乗りイギリスへの旅を果たしている。1856年、再びイギリスをはじめとしてヨーロッパの旅へと出る。翌年1857年には聖地パレスチナに着く。作家の個人的な体験がそのまま作品に反映されるというわけではないが、それぞれ『レッドバーン』（*Redburn*）『クラレル』（*Clarel*）といった作品の素材となっているこ

とは否めない。「レッドバーン」は旧世界イギリスと新世界アメリカの複雑な関係をテーマにし、「クラレル」はサイドの「オリエンタリズム」に挑戦すると言ってよいほどにオリエントへの傾倒を示した。

帝国への旅、植民地への旅、東洋への旅を果たしたメルヴィルと彼の作品におけるポストコロニアル的ヴィジョンを検証することをこのシンポジウムの目的とした。彼のポストコロニアル的ヴィジョンは早くも1952年、西インド諸島トリニダード生まれの批評家、C.L.R. ジェームズ (James) の着目するところとなった。トリニダードは当時イギリスの植民地であった。ジェームズは「水夫、反逆者、そして漂着者：ハーマン・メルヴィルの物語と私たちが生きる世界」(*Mariners, Renegades & Castaways: The Story of Herman Melville and the World We Live In*) において「ピーコッド号の旅は近代文明がその宿命を求める旅である」(19) であるとし、「最下級の水夫、反逆者そして漂着者」が日々従事する捕鯨業という産業労働こそ「英雄的行為」(28) であると論じる。資本主義的産業文明がもたらすひずみと植民地主義への文化的抵抗を「モウビー・ディック」のなかに見抜いたといえる。

ジェフリー・サンボーン (Geoffrey Sanborn) も『食人者のそぶり：メルヴィルと脱植民地主義的読者の素質』(*The Sign of the Cannibal: Melville and the Making of a Postcolonial Reader*) (1998) においてメルヴィルを「複雑に植民地化された世界の刷新」(xiii) へ向かう作家であるとする。

イギリス以前の植民地主義大国スペインが所有する奴隷運搬船における奴隷の反乱を扱う作品が「ベニト・セレノ」("Benito Cereno") である。ベニト・セレノが表す旧世界スペイン、アマサ・デラノが表す新世界アメリカ、そしてバボが表す第3世界の複雑な関係が物語には織りなされている。また、新大陸の発見者、クリストファー・コロンブスが植民地主義者として描かれているのもこの作品においてである。

世界の大国としての今日のアメリカの地位と、これまでにアメリカが関わってきた新植民地主義活動や経済的軍事的支配ゆえに、アメリカ文学はポストコロニアル文学として認識されない向きもある。しかし、ビル・アッシュクロフト、ガレス・グリフィス、ヘレン・ティフィンが『ポストコロニアルの文学』(*The Empire Writes Back*, 1989) においてアメリカ文学をこのカテゴリーに入れることを忘れてはならないとし、「アメリカが過去二世紀にわたって、本国の都市的文化の中心とのあいだで展開してきた関係は、ほかのあらゆるポストコロニアル文学のパラダイムとみなすこともできる」(2) と述べる。アメリカ文学は他のポストコロニアルの文学と共通する性質を持つという。それは、植民地主義体験やヨーロッパの帝国主義的支配との緊張関係のなかから帝国主義の中心が掲げる文化的前提からの差異を強調することによって現在の形を生み出し、自己を主張することであるとする。「最初にナショナルな文学を発展させたのはアメリカ合衆国であった」(15) とアッシュクロフトらは述べる。メルヴィルはそうしたアメリカ人のひとりであった。この観点から『ビリー・バッド』(*Billy Budd*) は「ポストコロニアルなテキスト」であるとローレンス・ビュエル (Lawrence Buell) は言う。

本シンポジウムでは、藤本幸伸は近代の監視管理のまなざしとしてのコロニアリズムを論じ、辻祥子は「ベニト・セレノ」をスペインとアメリカの関係を軸に考察し、大島由起子が晩年の詩におけるコロニアリズム批判を読み取り、藤江啓子は「ビリー・バッド」をアメリカの脱植民地化の物語として論じた。詳細は各発表者の報告書に委ねる。

引用文献

- Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths, and Helen Tiffin. *The Empire Writes Back: Theory and practice in post-colonial literatures*. New York: Routledge, 1989.
- James, C.L.R. *Mariners, Renegades & Castaways: The Story of Herman Melville and the World We Live In*. Hanover : UP of New England, 2001.
- Melville, Herman. *Typee: A Peep at Polynesian Life*. The Writings of Herman Melville. The Northwestern-Newberry Edition. Evanston and Chicago: Northwestern UP and The Newberry Library, 1968.
- Sanborn, Geoffrey. *The Sign of the Cannibal: Melville and the Making of a Postcolonial Reader*. Durham: Duke UP, 1998.

1. メルヴィルとコロニアルなまなざし

藤本幸伸

シンポジウム「メルヴィルとポストコロニアリズム」最初の発表者として、後に続くベントセレノ論、詩論、ピリーバッド論への地ならしの意味を込め、メルヴィルと欧米の植民地政策との関連を探ることを主な目的とした。

まず「白鯨」で言及される地図を契機に、地図の〈近代化〉が西洋による東洋の植民地化と連動することを確認し、次に西洋が東洋に向けた楽園幻想というまなざしの意味合いを探り、最後にこのまなざしが神殺しに行き着き、メルヴィル作品ではその神殺しの自覚がポストコロニアルな思考に繋がるのではないかと進めていく。

1. 地図の〈近代化〉、すなわち東洋の植民地化

ヘンドリックス版、ペンギン版、ノートン版、ロングマン版が少なからず注目する「白鯨」第44章の古い地図と航海記録に拘り、世界地図は何であったのかを考えてみる。大航海時代以前の世界地図では、西洋の一部を除いて空想で描かれる世界の姿は不正確であった。だが、この空想は西洋人の世界のイメージを見事に表現している。南方大陸や神々や天使など神話的異国の風物は、世界の果ての黄金の国や楽園の存在を語る。航海へと探検家たちを突き動かすのが、この地図に描かれた楽園と黄金のイメージで、そのまなざしの先には常に東洋があった。東洋幻想が西洋人の欲望をかき立て、国家事業としての大航海時代を牽引した。探検家たちが収集した情報を基に正確な地図が作成されていき、正確な世界の姿が出現すると共に、西洋人のまなざしを換金商品としての産物に向け一層欲望をかき立てるようになる。科学的実用的な地図の始まり、つまり地図の〈近代化〉は、東洋の植民地化の始まりでもあった。「白鯨」の鯨地図は鯨の生息域に加え、19世紀アメリカの欲望のまなざしをも語り、エイハブは地図の〈近代化〉の恩恵を受ける近代人の象徴と言える。

ところが、神話的な東洋幻想を描き込む地図から科学的調査探検地図に移行すると、西洋のまなざしは近代的地図に新たな欲望を読み込み、富を目指して東洋の植民地化へと向かっていく、そんな時代の象徴的存在がジェームズ・クックであった。

2. コロニアルなまなざし

正確な測量、鉱物や動植物の標本採集、土地領有を目的とするクックのまなざしには、もはや楽園としての東洋幻想は存在しない。奇妙にも、科学的探検から楽園の東洋幻想が消え去っていくのとは逆に、空想的旅行記や絵画には楽園幻想が執拗に再生産され続ける。クックの航海記を

三文文筆家のホークスワースがエキゾチックな旅行記に変えて出版し成功を納め、異国の風物を感覚的に伝達する絵画もエキゾチックな太平洋情報を提供していく。盗みをしたり怠惰で野蛮であったりする原住民たちが、絵の中では美しい自然に囲まれ豊かな楽園の住民として描かれ、野蛮な原住民と香料や砂糖など換金商品に溢れるエキゾチックな楽園とに、東洋へのまなごしは二重化しつつあった。

折しも、ダーウィンの進化思想やスペンサーの社会進化思想が流行し、楽園の富を高貴な野蛮人に代わって文明が活用しようという理屈が登場する。楽園としての太平洋幻想と絶滅種に代わって楽園の富を活用する西洋という構図に矛盾を見ないまなごしのことを、コロニアルなまなごしと呼んでおく。

「タイピー」は、楽園・カニバリズム・奇怪な習俗など太平洋幻想に浸る主人公が、欧米の植民地競争の中で翻弄される楽園の姿に怒り、文明化やキリスト教化による道德観念の墮落を批判するが、入れ墨を強要されると恐れをなして文明国へ逃げ帰るという物語。楽園幻想に浸る主人公トンモは顔への入れ墨を極端に恐れる。

1820年代マオリ族に囚われていたジョン・ラザフォードは、英国帰国後sideshowや freak showと言われる見せ物で、自分の体の入れ墨を大衆に晒すことで生計を立てていた。見せ物で大衆に晒されることは、動植物の標本と同じようにコロニアルなまなごしに晒されること、「相手の思い通りに扱われること」でもある。副題A Peep at a Polynesian lifeにあるように、姿を消して相手の生活を「のぞき見る」トンモは、「のぞき見られる」ことを嫌悪する。自分の姿を相手に見られないで監視管理するコロニアルなまなごしとは近代の監視管理のまなごしでもある。地図が近代化していくと同時に、航海記などの物語や絵画の中で太平洋幻想が繰り広げられていくのは、本来的に全ての人の行動を監視する、このコロニアルなまなごしを自分に向けないよう抑圧するための戦略であった。

3. 神殺しの自覚

ダーウィン進化思想と同じように、コロニアルなまなごしは神殺しのまなごしに行き着く。エマソンが考えたように、神が姿を隠して被造物を支配するように、人間も透明となって全てを見通すことができれば、自然の神秘を掌握できる。自らの姿を隠して他者の振る舞いを支配するコロニアルなまなごしは、神のまなごしでもある。

1856年に久々に再会したホーソンがメルヴィルに見たものは、神のまなごしを持ってしまった近代人として自分たちが神殺しだと自覚するかどうかの間で揺れる姿であった。自然（神の書物）の観察を通じて創造の意図を証明しようとした西洋近代は、その誠実な探求の果てに自分たちには神に匹敵する力があると自覚するようになるが、神はただ支配する存在ではなく死や悪からの救済をも司る存在であった。神殺しの近代人は神の力と引き替えに、これまで神に委ねていた死や悪からの救済を神に頼れなくなった。復活のない死やこの世の悪の存在を甘受することになった。この力と救済のない死との間での心の揺れがエイハブやイシュメイルに反映されていく。

「白鯨」では、「タイピー」の世界を引きづりながら、それを否定していく。“an illustrated

copy of Goldsmith's Animated Nature”と形容されるコリコリ、“George Washington cannibalistically developed”と表現されるクィークェッグ、「高貴な野蛮人」の二人をこう形容するのは、「悪意のある間違い (“the same heinousness of mistake”）」だと「白鯨」で否定して、太平洋幻想を弄ぶトンモ的抑圧したまなざしの矛盾を暴露していく。

このコロニアルなまなざしの矛盾を痛烈に皮肉る場面が、スターバックらが鯨を仕留めようとして失敗し、遭難し罹りながらやっとの事で火をつけたランプをクィークェッグに渡す場面、「高貴な野蛮人」としてコロニアルなまなざしの対象となるクィークェッグがスターバックたち西洋近代人の救いの担い手となる場面である。“that imbecile candle in the heart of that almighty forlornness”と表現されるランプの火を支えているのが「無信仰の象徴」とされるクィークェッグとなれば、コロニアルなまなざしの矛盾に無意識であるトンモ的西洋人を痛烈に皮肉っているのは明らかであろう。

このような西洋近代が抑圧してきたコロニアルなまなざしの矛盾を自覚するのが、エイハブとフェダラーである。イシュメイルたちが神殺し後の世界にまだ神の救済を期待するのに対して、この二人は自分たちが神殺しであることを自覚する。この世界では自分たちの死が徹底的に無機質であることを覚悟するこの二人には、必ず死の影が付きまとう。白鯨に襲われ海に放り出されたエイハブを、死には何の意味もない、それ故恐怖もないとでも言うように、冷然とした目つきで見つめるフェダラーの死は虚飾をはぎ取られた言葉で描かれる。そして、エイハブの死も、白鯨に対する憎悪を語る雄弁と比べ、あまりにも無機質と言える。神を殺しもはや神に救済を頼めなくなった近代では、死に救済はないと覚悟しなければならない。エイハブとフェダラーの死が神話化を拒むことで、メルヴィルはこの覚悟を表現しようとしたのかもしれない。

だが、メルヴィルは神殺しを覚悟した近代人ではなくイシュメイル的なコロニアルな無意識の方を生き残らせた。ここにメルヴィルの揺れが現れている。この揺れは「白鯨」以降の短編に繰り返し登場し、ホーソンが感じ取ったように、メルヴィルはコロニアルなまなざしの無意識と神殺しとしての近代人の覚悟の間を揺れ続けたと言えるのではないだろうか。

参考文献

- Crary, Jonathan. *Techniques of the Observer: on Vision and Modernity in the Nineteenth Century*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 1990.
- Melville, Herman. *Moby-Dick* Ed. John Bryant and Haskell Springer. New York: Pearson Education, Inc. 2007.
- . *Moby-Dick* Ed. Hershel Parker and Harrison Hayford. New York: W. W. Norton & Company, 2002.
- . *Moby-Dick* Ed. Harold Beaver. Harmondsworth: Penguin, 1972.
- . *Typee* Ed. Geoffrey Sanborn. Boston: Houghton Mifflin Company, 2004.
- . *Typee* Ed. John Bryant. Harmondsworth: Penguin, 1996.
- Sanborn, Geoffrey. *The Sign of the Cannibal: Melville and the Making of a Postcolonial Reader*. Durham: Duke U P, 1998.
- Suarez, Thomas. *Early Mapping of the Pacific: the Epic Story of Seafarers, Adventurers, and*

メルヴィルとポストコロニアリズム

Cartographers who Mapped the Earth's Greatest Ocean. Singapore: Periplus Editions, 2004.

Thrower, Norman J. W. *Maps & Civilization: Cartography in Culture and Society.* 2nd Edition. Chicago: the U of Chicago P, 1996.

石原保徳 「大航海者たちの世紀」 評論社 2005年

応地利明 「世界地図」の誕生」 日本経済新聞出版社 2007

ジェームズ・クック 「クック 太平洋探検」 岩波文庫 2004～2005年

増田義郎 「太平洋 開かれた海の歴史」 集英社新書 2004年

松永俊男 「ダーウィンの時代 科学と宗教」 名古屋大学出版会 1996年

2. 「ベニト・セレノ」における奴隷制批判再考

—イスパニョーラ島の歴史とイスパノ・フォービアから

辻 祥子

「ベニト・セレノ」は、1805年2月、航海の途上で黒人奴隷に反乱を起こされ、チリ海岸沖に漂流中だったスペイン国籍の商船が、偶然通りかかった海豹捕獲船に救助されるという実在の事件に基づいたものだが、メルヴィルはこの体験を綴った海豹捕獲船のアメリカ人船長デラノの手記に様々な改変を試みている。デラノは、救援物資を持ってスペイン船を訪れた当初、船が反乱奴隷に乗っ取られていることに気づかない。実話ではセレノが、デラノの前では反乱の事実を隠すよう、裏で奴隷たちに提案していた。これ以上奴隷たちを動揺させ自らの身に危害が及ぶのを恐れていたのだ。一方、作品では反乱黒人のリーダー、バボの狡猾さが強調される。バボがその隠蔽工作を率先して画策し、自らはセレノの忠実な下僕を演じる。彼には隙を見てデラノの船も乗っ取ろうという企みがあるのだ。この仮面劇にデラノが騙された理由として、彼が黒人は生来劣等であるという偏見の持ち主で、バボの下僕役をそのまま信じたことがまず挙げられる。

しかしながら、重要な理由がもう一つあることに注目したい。デラノ船長はバボの存在には油断する一方で、様子がおかしいスペイン人セレノを執拗に疑い続ける。セレノこそが自分の命を狙い、自分の船を乗っ取ろうとしているのではないかと。実話を改変した後のストーリーではセレノは無力で、この容疑はまったくのお門違いである。デラノ船長の真実を見抜く目は、こうしたスペイン人に対する不信感によって曇らされているともいえるのだ。また最後にはバボの隠蔽工作が明るみに出て、反乱奴隷たちはみな捕らえられるが、それでもなおセレノは黒人の影に怯え続ける。デラノはこのときのセレノの苦境をまったく理解できず、過ぎ去った過去は忘れるよう促すのである。ここにも、スペイン人の複雑な事情まで踏み込むことができない、あるいは踏み込みたくない、アメリカ人デラノの心理が表れている。このように設定したメルヴィルの意図は何なのか。

その核心に迫るべく、メルヴィルが施した他の改変に目を向けたい。難破船の名前が、実在の「トリアル」号から「サン・ドミニック」号に変えられ、作品の随所で、スペインによる新大陸、特にイスパニョーラ島サント・ドミンゴの植民地支配の歴史が暗示されている。スペインはこの地を300年以上支配し続けた結果、復讐に燃える黒人奴隷たちの反乱に苦しめられ、恐怖にさいなまれることになる。こうしたスペイン側の状況は、当時、南部でいくつかの奴隷反乱を経験しているアメリカにとって、対岸の火事とは言えぬ危惧すべきものであったはずだ。しかし大半のアメリカ市民がスペイン人の苦境を、自国の奴隷制を省みる材料にはしなかった。その一因として、16世紀から19世紀初頭にかけて、植民地獲得競争の覇者として君臨し続けたスペインに対する、他の列強諸国の反感＝イスパノ・フォービアを、アメリカが共有していたことが考えられる。そこで、イスパノ・フォービアに妨げられ、植民地支配の末路に目を向けないアメリカ人と、ス

ペイン人に対する不信感や、共感の欠如から、セレノの過去、現在、未来に渡る苦しみを理解できなかったデラノは重なっていないだろうか。

本発表では、作品の中に暗示された、サント・ドミンゴにおけるスペインの植民地政策の歴史や、当時のアメリカ人のイスパノ・フォービアに注目することで、メルヴィルの奴隷制に批判的な姿勢をより明確にしたい。

「ベニト・セレノ」には、15世紀末のアフリカ奴隷貿易の起源ともなる歴史が織り込まれていることは、すでに多くの批評家が指摘している。奴隷反乱前のサンドミニック号の船首につけられていたのがコロンブスの像であること、さらにベニト・セレノがスペイン皇帝カルロス5世に喩えられていることなどから、コロンブスが1492年イスパニョーラ島を発見した直後、カルロス5世が奴隷貿易に法的な許可を与え、島の東南の町サント・ドミンゴを西半球における最初の黒人奴隷輸入地にしたという歴史が浮かび上がる。また、スペイン船やスペイン人に関する比喩として、僧院やドミニコ会修道士のイメージが多用されていることから、スペインによる奴隷貿易に、カソリック僧が大きく貢献していた歴史が読み取れる。メルヴィルは「ベニト・セレノ」の中で、スペインの聖職者、広く捉えればキリスト教徒が奴隷貿易に関わった罪を糾弾しているのである。

さらに、メルヴィルは作品の中で、「サン・ドミニック号」における奴隷反乱の年を、実際に起こったトリアル号事件の年、つまり1805年ではなく、1799年に変更している。その意味を歴史の中で考えると、イスパニョーラ島発見から約200年後の1697年、条約により領土の3分の1がフランスに譲渡され、西側がスペイン領サント・ドミンゴ、東側がフランス領サン・ドマングとなる。それからさらに約100年が経過した1791年から10年以上にわたって、サン・ドマングで奴隷反乱がおり、1804年に共和国ハイチが生まれる。これは隣のサント・ドミンゴを支配するスペインだけでなく、世界各地で植民地を抱えるあらゆる列強諸国—当然アメリカを含む—を恐怖と不安に陥れた大事件だった。つまりメルヴィルは作品の舞台を、ハイチ共和国成立直後ではなく、奴隷反乱の只中であるはずの1799年に変更し、物語の奴隷反乱に真実味を持たせている。そこで西半球の奴隷貿易の発祥地が、世界初の奴隷反乱成功の地となり、黒人による共和国誕生の地ともなったという歴史の皮肉を、作品の中で改めて想起させる意図があったと考えられる。

最後に当時の読者にとって最新の、つまり1850年前後のイスパニョーラ島をめぐる状況が暗示されている可能性を見てみたい。まずは作品中に、灰色のイメージや、黒と白が混じったイメージが繰り返され、黒人に圧倒されそうな白人、あるいは混血の進む社会を象徴しているとも取れる表現が認められることに注目したい。これは、作品が書かれた1855年当時の、ハイチに脅かされるスペイン領ドミニカを意識したものと考えられる。ハイチ革命の時期から1850年代までの歴史を辿っておくと、サント・ドミンゴは、19世紀の初頭、スペイン本国から独立するか否かをめぐって内戦状態となり、その混乱に付け込まれて1822年、隣国ハイチに攻め入れ、以来20年以上も支配を受ける。1844年ようやく、スペイン人入植者によって独立を果たし、サント・ドミンゴ・ドミニカ共和国となる。そこに再占領をねらう隣国ハイチが、スールークという冷酷で狡猾な黒人の軍人を中心にして1849年、1850年の2度攻め入っており、平和を脅かしていた。それにともない、ドミニカは1852年にふたたびスペイン領になるが、その後も保護を求めてアメリカと合併交渉を進めていた。それに対しスールークは、ドミニカが奴隷制度を復活させるのではな

いかと危惧し、1855年に3度目の攻撃をしかける。ハイチは3回とも無残な敗退を余儀なくされているが、ハイチの攻撃がドミニカだけでなく、アメリカにも大きなインパクトを与えていたことは確かである。当時のドミニカは黒人と白人の二極分化が進んでおり、比較的アメリカの状況と似ていた。一方で、ハイチは黒人が絶対権力を握っている上にかなり混血が進んでいた。このままハイチがドミニカを脅かし続け、隣国アメリカが策を講じなければ、島全体が黒人に乗っ取られてしまう。それどころか、アメリカの奴隷反乱を助長し、白人支配や白人の純血をも危うくするのではないか、そういった不安は、南部のプランターを中心に広がり、北部の雑誌でも取り上げられている。

「ベント・セレノ」で黒人の反乱の被害に遭い、最終的にアメリカ船の援助を受けて、黒人を撃退するスペイン船サン・ドミニック号の話は、1850年代のスペイン領ドミニカの内情とアメリカとの関係を偶然にもよく反映したものとも言える。そして、狡猾で残忍な反乱のリーダー、バボは、「アフリカの恐ろしい専制君主」としてアメリカ南部のプランターにも恐れられていたスルークをモデルにしたものとも考えられるのだ。

こうしてみると、サン・ドミニック号で起こるドラマには、サント・ドミンゴを中心としたイスパニョーラ島の植民地の歴史がその起源から最新の状況まで盛り込まれ、一つの教訓が暗示されている。つまり、この地で黒人奴隷を酷使し利益を搾取した白人は、実に300年以上の月日が経過したのちに、黒人から復讐され、大きな代償を払うことを余儀なくされるという教訓である。

一方デラノは、セレノをはじめ、スペイン人乗組員全員に対する疑念を抱き、それが解消したあとも、セレノが置かれた苦しい状況に対して深いレベルでの理解ができない。このことは何を意味するのか。デラノとセレノの距離感は、デラノのスペイン人に対する否定的な感情や偏見から生まれたことは否めない。

スペイン人に対する偏見や恐怖は、「イスパノ・フォービア」と呼ばれるが、スペインがヨーロッパの様々な国との間で抗争を繰り返し、世界の帝国にのし上がるにつけ、ヨーロッパ人の間に芽生えていったものである。アメリカは、独立直後、メキシコなどの領土をめぐるスペインと対立したことから、この感情を共有することになる。彼らは北アメリカの「アングロ系」開拓者たちを「祖国の建設者」として賛美する一方、スペインの植民者に対しては危険な存在として侮蔑や無視の態度を通したという。つまり、スペインを悪者にすることで、自分たちの侵略行為の罪を免れようとしたのである。こうしたイスパノ・フォービアは、アメリカとサンドミンゴの関係にも陰を落とす。ハイチ革命や、その後のハイチによるスペイン領への攻撃の際、大半のアメリカ人は、スペイン側の苦境を把握しきれていないし、ましてや自国の奴隷制度を反省し、奴隷解放を行おうという動きは見られなかった。

アメリカ人は、スペインの植民地主義に対する妬みや反発から、スペイン人を不可解な他者（異人種）と捉え、彼らの悲劇の延長線上に自分たちを置いて考えることはしない。メルヴィルは、アングロサクソン優越主義の楼閣に居座って、国内の奴隷制に無策であるアメリカ人を、デラノ船長のスペイン人に対する描写を通して暗に批判しているのではないだろうか。

参考文献

- Brickhouse, Anna. *Transamerican Literary Relations and the Nineteenth-Century Public Sphere*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Franklin, H. Bruce. "Apparent Symbol of Despotism Command' : Melville's 'Benito Cereno,'" *New England Quarterly* 34 (1961): 462-77.
- Hunt, Alfred N. *Haiti's Influence on Antebellum America: Slumbering Volcano in the Caribbean*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2006.
- MacLeod, Murdo J. "The Soulouque Regime in Haiti, 1847-1859: A Reevaluation." *Caribbean Studies* 10.3 (1970):35-48.
- Meacham, Gloria Horsley. "The monastic Slaver: Images and Meaning in "Benito Cereno." " *New England Quarterly* 56.2 (1983): 261-66.
- Melville, Herman. *Billy Budd, Sailor and Other Stories*. New York: Penguin Books, 1967.
- Powell, Philip Wayne. *Tree of Hate: Propaganda and Prejudices Affecting United States Relations with the Hispanic World*. New York: Basic Books, 1971.
- Salc, Maggie Monstesinos. *The Slumbering Volcano: American Slave Ship Revolts and the Production of Rebellious Masculinity*. Durham: Duke UP, 1997.
- Sundquist, Eric J. *To Wake the Nations: Race in the Making of American Literature*. Cambridge: Belknap P of Harvard, 1994.
- "On the rumored Occupation of San Domingo by the Emperor of France," *United States Democratic Review* 32.2 (1853): 73.
- "Soulouque and the Dominicans." *United States Democratic Review* 30. 164 (1852): 137-149.
- パウエル、フィリップ・ウエイン「憎悪の樹：アングロVS イスパノ・アメリカ」西澤龍生・竹田篤司 訳 論創社 1985年。

3. メルヴィル最晩年の詩 ——楽園に触れるということ

大 島 由起子

最晩年のメルヴィル(1819-91)の創作欲には瞠目すべきものがあつた。彼は表現者として挫けず、長編小説の筆を折ってから、命尽きるまで寸暇を惜しむように読書と執筆に勤しんだ彼を運も見捨てなかつた。「ジョン・マー」(*John Marr, and Other Sailors*, 1888)や「ティモレオン」(*Timoleon, Etc.* 1891)に収められた詩については、以前よりは研究対象とされるようになったとはいえ、形而上学的高邁な詩や美学関連が主な対象である。少なくとも異教的な大らかさとエロス、そしてそれと連関している近代批判精神は等閑視されてきた。しかし老いてなお、作者の西洋近代にたいする反逆精神は健在であつた。

「タイピー」(*Typee*, 1846)や「オム」(*Omoo*, 1847)に留まらず、晩年になつてもメルヴィルはタイピーを髣髴させるマルケサス諸島を墮落以前の楽園として呈し、その破壊者を呪詛する。詩集表題作「ジョン・マー」("John Marr")では、生活に華がなく、海にも芸術にも興味を示さない開拓農民に声を奪われたかたちの主人公マーは、かつての船乗り仲間のファントムのことばかりを想う。初めのうちこそ臆としていたが形をとるようになる恋しい仲間とは、刺青を施した耳飾りの「蛮人」たちである。全体の三分の一弱を占める韻文セクションでは、マーが狂おしくも頓呼法で謳いかけたところで作品が閉じ、詩集が始まる。

詩「多島海」("The Archipelago")では、ポリネシアをギリシア神話のパンの神が司っていた楽園にだぶらせて失楽園を謳う。「鳥々が空っぽだったことなど、まずなかつた/テーセウスがローリーのような輩を漂浪させしその昔には、/どの島も素敵なバージニアだったが—/魂は奪われていなかつた」と。そうした輩の侵入後に、島民は数を減らし、椰子も馥郁たる香りも優雅も奪われた。詩はローリーへの言及により、北米を植民したイギリスを重ねあわせている。むろん、世界中で幾多の先住の民が植民地主義による被害を被ったわけだが、生涯をとおして作者は、南海の先住の民を北米先住民とだぶらせることが多かつた。

「多島海」と同様の主題は、これまた昔日のポリネシアのことを愛惜をこめて回顧する詩「うらやましき島々」("The Envious Isles")にも認められる。島を知ろうともしない近代白人が遠目に見るかぎり、民の幸せなどわかりようもないが、嵐に見舞われて(タイピー族がいるような)奥地の緑したたる楽園に辿り着けば、神々が宿る森羅万象が親しみあい、死の概念すらなかつたと描かれている。そこでは「<神様>だって恍惚さ—/上にゃ、気が遠くなりそうな霧かかり/椰子がわさっと恋人の糸杉にご挨拶/谷底の小川じゃ小石たち吹き/喜びも悲しみも歌ってあやす」。浜では人は「笑窪浮かべてまどろんで、/波が打ち寄せては死にゆくなど、知るよしもなし」。批評家諸氏は、島は眠りと死が領する<生の中の死>にすぎず、よつてこれはポリネシア批判の詩であると評する。しかし作品題目を虚心に受け止め、かつ家屋や木陰ではなく浜辺に無数の島民

が笑窪を浮かべてまどろむ無防備さに着目すれば、詩は、白人侵入によって近未来にもたらされる、文字通りあるいは比喩的な集団殺戮の予見を帯びる。また、「多島海」や「ネッドよ」(“To Ned”)と併読するとき、本詩「うらやましき島々」は植民化前夜を詠い、ポリネシアに侮蔑的どころか批判の矛先は侵入者に向けていると読め、作家のポリネシア観にぶれはないことが確認できよう。

「俺らがよ、彷徨いしあそこはどこ行っちゃった、ネッド・バン」と気楽なよびかけで始まる「ネッドよ」でも、白人が資本主義を携えて入り込み、文明化の名の下に島々を変える前の「真のエデン」マルケサスの失楽園を謳う。そして、かつての仲間へ呼びかける気安さもあずかってか、悪乗りをしているというまでに快樂を肯定している。謳い手は「ポール・プライが<金銭>や<交易>もたらすまでは 捨て置いてもらえて航海者にやられずにすんでたあそこ」、つまり今の「若い者にゃ行けぬ秘境」を回顧し、自分と(『タイピー』の主人公トピーを彷彿させる)朋友ネッドは果報者であったと、詩に多幸福感を横溢させる。「ありきたりの行楽に飽きちまって/快樂道を究めようって奴は、俺たちの<汎神的>港に/逃げて来なくちゃなあ、ネッド。—/マルケサス、溪谷の島々は<異教>の海に浮かぶ真正正銘の<エデンの園>だったさ」と詩を閉じる。謳い手は、南海は「真夏の夜の夢」顔負けの不思議の世界だったというからには、メルヴィルは自分がかねてより敬服していたシェイクスピアを超えたというほどの自負すら漂わせている。

詩は「人はサトゥルヌスに負けたにしたって/人生ってもんはシリアへのくそ真面目な巡礼なんかじゃないってわかってる」と、白人に農耕を押し付けられて「文明化」されようとも、快樂の肯定をする。更には「やれやれ、アダム殿が賢げな足取りでお進みだが、俺に言わせりゃ、お宅の辿る道にゃ紫が足りないぜ」と妙な表現をする。アダムの足取りなるものは、知やテクノロジーの進歩の謂いでもあろう。進歩した白人は、紫に象徴される快樂において南海人に劣ると述べ、白人が信じる進歩絶対説を覆す。自分は、キリスト教徒として生真面目な聖地巡礼をするよりも、記憶のなかで美化された南海に魂を向かわせ楽園に入るのだと。

作者は生涯、頻繁に船乗りことばを用いて人間を船に喩えるが、本詩「ネッドよ」の最終行の touch とは、港に立ち寄ることを意味する。メルヴィルは宗教的苦悩を一生抱えて生きたようにみなされやすいが、現世とあの世で楽園に寄港する、つまり楽園や天国に行けるといった個所を目にすると、その楽道家ぶりに驚かされる。

詩「聖なる煙草」(“Herba Santa”)では、煙草をくゆらせれば北米先住民的な気分を勝ち取れ、ひいては楽園を取り戻せると詠う。「ネッドよ」最終連で唐突に「先住民」ということばで表れ出していたが、先住民にあやかって楽園を取り戻す方策は、「聖なる煙草」では前面に押し出されている。孤立しているらしい謳い手は、先住民の和平パイプ、同じく先住民のカムレットという儀式用パイプを救済手段とする。異文化趣味にはとどまらない。謳い手は魂の「東洋の小部屋」で中国茶を飲み、カムレットや<和平パイプ>で憩うとき、「福音」にあずかれるという。西洋ユダヤ・キリスト教世界は、人を罪意識におののかせたが、教会が癒せなかった草草を、カムレットがgodとして文化横断的に癒してくれるというのである。

「聖なる煙草」の詩行には、「ローリーが見つけるまでは/温かく抱いてくれる、そなたなる慰めを知らなかった世のために/そなたはギリアデには癒せないことも癒してくれる/えもいえぬ心地よさで癒してくれる」と、またしてもローリーへの言及がある。合衆国は当初の経済発展をタ

バコに負った。エリザベス1世の寵臣ローリーがパイプをくゆらすと、イギリスではパイプが紳士のたしなみとされるほどに流行った。西洋で煙草は万能薬と言われ（本詩の題名もそこに由来する）人気を博していたのに、詩はローリーがもたらすまで西洋は煙草を知らなかったなどと歪曲し、果ては先住民が福音をもたらしたとして通念を覆す。島民を殺し、文化も魂も壊した白人の代表格として、先述の「多島海」でのローリーの名ざしを見るにつけ、作者が自国アメリカを意識していることがわかる。南海でのプライにせよ北米でのローリーにせよ、白人による侵略の先駆けとなった。

検討してきた系譜に属する詩では、交易呪詛や宣教師呪詛も顕著である。詩「シラ」(Syrá)では、エーゲ海のシラ島が様々な国の支配を受けたことにより、「暮らしそのものが余暇で、陽気、平安だったとき。/金銭はなく、愛は義であった」のに、「若々しい楽しみ」を失い、重労働とストレスを与えられたという。作者は、宣教師は至福千年説をかざして、人に現世の労働にあけくれさせ、搾取、資源略奪を思いのままにする口実としたと、コロニアリズムのからくりを透視してもいた。

メルヴィルがそうした独特の多元文化的境地に達した源としては、彼が若き日にポリネシアが植民化される直前の姿と、タヒチ島ならびにハワイで植民化された直後を目撃した意義が大きいであろう。メルヴィルが訪れた段では、タイピー族の島は、仏軍艦が停泊中とあって、コロニアル時代に突入直前であり、獐猛という評判ゆえにタイピー族部落への侵略は始まっていなかった。メルヴィルはそういう時空に居合わせて楽園喪失前の姿を見た者として、年老いてなお愚直なまでに自らのポリネシア体験に向かい合ったのではなかっただろうか。以上のように、メルヴィルは南海を舞台とした初期作品のみならず晩年の幾つかの作品でも、いわばプリコロニアルを忍び、コロニアルを呪詛してやまなかったといえよう。

4. ポストコロニアリズムと『ビリー・バッド』

藤江啓子

1 はじめに

ローレンス・ビュエルはハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の遺稿「ビリー・バッド」(Billy Budd) を「ポストコロニアルなテキスト」(94) として位置づける。主人公ビリーは名目上は「イギリス人」(51、120) とされながらも、墮落以前のアダムのイメージを付与されているがゆえに、R. W. B. ルイスの「アメリカのアダム」を連想させるからである。ビリーは旧世界の植民地主義の象徴ともいえる大英帝国の海軍に強制徴募されるが、古い秩序からは逸脱する。無垢と純粹、そして原初性ゆえに経験やヒエラルキー的秩序、あるいは法の支配する旧世界では生きていけないのである。本稿は「ビリー・バッド」をアメリカがイギリスの植民地主義支配から脱植民地化する物語として文学的、政治的、イデオロギー的に重層なレベルで読み解くのがねらいである。

2 文学的脱植民地化

『白鯨』をナサニエル・ホーソンにささげ、「ホーソンと彼の『苔』」においてホーソンをシェークスピアに匹敵する大作家であると讃えたメルヴィルはアメリカ文学のイギリス文学からの独立を促し、新しい種類の文学を生み出す試みを行った。

『ビリー・バッド』もそのような文学の一つである。「ベリポタント」号の艦長ヴィアの通り名「星のようなヴィア」はイギリスの形而上詩人アンドルー・マーヴェルの「アプルトン屋敷を歌う」(“Upon Appleton House”) からとられたものである。アプルトン屋敷の主人である英国議会派の将軍フェアファックス家の娘メアリーとビリーの運命が重ねられているのである。メアリーは政略結婚をさせられる運命にあり、その不吉な将来を両親は憂慮する。「ベリポタント」号の艦長ヴィアとビリーも親子関係にたとえられており、メアリーとビリーというふたりの子供の将来に対する不安は本国から離脱する植民地の運命にも似、「脱植民地的不安」(ビュエル 79) ともいえる。そして「アプルトン屋敷を歌う」が伝統的英詩のキャノン、すなわち中心に位置する文学であるのに対して、「ビリー・バッド」は民謡という口承文化、すなわち文学的周辺に位置するものを下敷きにしている。また、「ベリポタント」号の艦長ヴィアは「人類については、形式、慎重な形式がすべてだ。そしてそれがオルフェウスが森の野生の鳥獣・樹木を豎琴で魅了した物語の意味だ」(128) という。彼のいう「形式」は海軍の習慣の基準であり、大英帝国の安全と旧世界の救済を保障する目的のための手段である。ギリシャ神話の詩人オルフェウスは豎琴の名手で、無生物まで感動させたといわれる。その言葉の管理能力で野蛮な自然を文明化させるゆえに、植民地主義のイデオロギーにしばしば組み入れられている。ヴィアはオルフェウ斯的であ

り、野蛮な自然人として描かれるピリーは反オルフェウスの被征服者といえる。「ピリー・パッド」は帝国の中心に抵抗する脱植民地化の詩学を物語るテキストといえるのである。

3 政治的脱植民地化

「形態、慎重な形態がすべてだ…」と言うヴィアの言葉に続けて、メルヴィルは次のように書いている。「そして英仏海峡の向こうで起こった形態の崩壊とその結果にかつてこれを応用したことがある」(128)と。英仏海峡の向こうで起こった形態の崩壊とはフランス革命のことである。ヴィアは古い政治体制や秩序が新しい革命精神によって崩壊するのを恐れる。それは水夫の反乱によって船長を頂点とする船上のヒエラルキー的秩序が崩壊することを意味するからである。オルフェウスはフランス王室、軍艦、あるいは艦長ヴィアと置き換え可能であり、彼が「魅了する／呪文で縛る (spellbinding)」野性の鳥獣はフランスの民衆であり水夫、あるいはピリーと置き換え可能である。古い秩序や政治体制とそれに対する反乱、革命、あるいはそこからの離脱、独立は重層的に一つのテーマとなって作品を流れる。その大きな枠組みがピリーが強制徴募される前に乗っていた「人権」号と強制徴募後に乗った「ベリポタント」号の二つの船に象徴的に現れている。

ヴィアを艦長とする「ベリポタント」号は大英帝国軍艦 (H.M.S.) で、「戦いに強い」という意味を持ち、帝国主義的支配構造を頭にする。ところが一方、民間商船「人権」号はその船の持ち主がトマス・ペインの熱烈な崇拜者であったところからその名がつけられたという。当時エドモンド・バークが「フランス革命の省察」(1790年)においてフランス革命を弾劾したのに対し、ペインは「人間の権利」(1791年)を著すことによって、フランス革命を擁護した。ヴィアはエドモンド・バーク的保守主義を表し、ピリーは「人権」を主張する急進的で抑圧された民衆の声を代表する。トマス・ペインは「コモン・センス」(1776年)においてイギリス人でありながらアメリカのイギリスからの独立を擁護した人物でもある。水夫の反乱やフランス革命は、アメリカ革命、すなわちアメリカの脱植民地化とトランスナショナルに共振するものとして描かれているのである。

4 征服のイデオロギー・文明対自然

自然あるいは野蛮を文明化するというのは植民地主義の言説である。それはまた異教徒をキリスト教化することでもある。クリストファー・ステンが「文明化という目的は自然人の避けられない犠牲を正当化するのか？」(305)と述べているように、「ピリー・パッド」においてもこうした植民地主義的言説が組み込まれているように思われる。「形態がすべて」と語るヴィアがオルフェウスの文明の象徴であることは先にも述べた。大英帝国と旧世界の秩序と安全を第一とし、文明化の名目で植民地主義を推し進めるヴィアに対し、ピリーは征服され、犠牲を強いられる反オルフェウスの自然人として描かれる。例えばピリーはローマ帝国によって植民地化されたイギリス人、南海の原住民、あるいはアフリカ人として描かれている。また彼の死はアメリカ先住民が滅亡するイメージ、すなわち雪解けのイメージで捉えられていることなどである。

5 おわりに

以上、「ビリー・バッド」をアメリカの脱植民地化の物語として読んできた。ローマ帝国によるイギリスの植民地化、フランス革命、南海に対する植民地主義、アメリカ先住民への迫害などへの言及があり、アメリカのイギリスからの脱植民地化と言い切れない面もある。きわめてトランスナショナルに共振し、相互に照射しているのである。また、メルヴィルがこの作品を執筆するにあたって、直接の動機ではなかったにせよ、1842年の米国艦船サマーズ号反乱事件を念頭においており、実際には米国の帝国主義的な側面を意識していたことは確かである。メルヴィルの生きたアメリカは西部開拓、テキサス併合、南海への宣教活動、キューバへの侵略、資本主義的経済の拡張などすでに帝国主義的あるいは植民地主義的な様相を呈していた。国内でも奴隷制度や先住民迫害の問題を抱えていた。ブルース・フランクリンが「帝国から帝国へ」と論じるのももっともである。長編詩「クラレル」においてもアメリカがイギリス同様に帝国主義的相貌を帯びたことを非難し、「私たちの大胆な新世界は / 旧世界を喜んで改善してきた / だが、両半球は相似だ」(4・5・62—64)とメルヴィルはアメリカ人ロルフに語らせる。しかし、そうしたなかにあつて、物語が起こった時をアメリカ独立後まもなくに定め、反オルフェウスの自然人であるビリーを英雄として描くことによって、そして「手錠のビリー」という民謡のなかでビリーを蘇生させることによって、脱植民地化の詩学を提唱し、アメリカ文学の独自性と普遍性をメルヴィルは残したかったのではないだろうか。

引用・参考文献

- Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths, and Helen Tiffin. *The Empire Writes Back: Theory and practice in post-colonial literatures*. New York: Routledge, 1989.
- Buell, Lawrence. "Melville and the Question of American Decolonization," in *Melville's Evermoving Dawn: Centennial Essays*. Ed. John Bryant and Robert Milder. Kent, Ohio: The Kent UP, 1997.
- Cain, Thomas H. "Spenser and the Renaissance Orpheus," *University of Toronto Quarterly*, Volume XLI, Number 1, 1971.
- Davis, Evan R. "An Allegory of America in Melville's *Billy Budd*" *The Journal of Narrative Technique* 14, Fall, 1984.
- Franklin, Bruce. "From Empire to Empire: *Billy Budd, Sailor*" in *Herman Melville: Reassessments*. Ed. Robert Lee. London: Vision P Ltd., 1984.
- Gardiner, David. "Oh, How Unlike Unto Orpheus: The Poetics of Colonization" *Renaissance Forum*: Volume 4, Number 2, 2000.
- Lewis, R.W.B. *The American Adam*. Chicago: U of Chicago P, 1955.
- Marvell, Andrew. *The Poems of Andrew Marvell*. Ed. James Reeves and Martin Seymour-Smith. London: Heinemann, 1969.
- Melville, Herman. *Billy Budd, Sailor*. Ed. Harrison Hayford and Merton M. Sealts, Jr. Chicago: The U of Chicago P, 1962.

- . *Clarel: A Poem and Pilgrimage in the Holy Land. The Northwestern-Newberry Edition.* Evanston and Chicago: Northwestern UP and The Newberry Library. 1991.
- . "Hawthorne and His Mosses." *The Portable Melville.* Ed. Jay Leyda. New York: The Viking P, 1952.
- . *Typee: A Peep at Polynesian Life. The Writings of Herman Melville. The Northwestern-Newberry Edition.* Evanston and Chicago: Northwestern UP and The Newberry Library. 1993.
- Rogin, Michael Paul. *Subversive Genealogy: The Politics and Art of Herman Melville.* Berkeley: U of California P, 1983.
- Sten, Christopher. "The Dilemma of Nature & Culture: *Billy Budd* as Problem Novel" in *The Weaver God, He Weaves: Melville and the Poetics of the Novel.* Kent, Ohio: The Kent State UP, 1996.
- Tecumseh, "Sell a Country? Why not Sell the Air?" (1810 - 11). Frederick W. Turner, III (ed.), *The Portable North American Indian Reader,* New York and London, Penguin, 1977.
- Williams, Raymond. *The Country and the City.* New York: Oxford UP, 1973.

今村楯夫編著『アーネスト・ヘミングウェイの文学』

（ミネルヴァ書房、2006年11月、298pp.、本体3,500円）

本 莊 忠 大

MINERVA 英米文学ライブラリーシリーズの一つとして出版された本書は、「ヘミングウェイの世界」、「ヘミングウェイとアメリカ作家」、「ヘミングウェイとFBIファイル—ファイルの空白に見る隠された素顔」、「ヘミングウェイと日本作家」という4部から構成され、ヘミングウェイの実人生と文学について、現在の視点から再読、再評価することにより、従来の批評を超えたその全体像を明らかにし、ヘミングウェイ研究の新たな方向性を開拓する刺激的な批評論集である。

第I部の前田一平氏による導入論文「読み直されるヘミングウェイ—[男らしさ]の変容」では、時代の流れと共にヘミングウェイの男性中心的な「マッチョ」像が変容していく様相と、ジェンダー／セクシュアリティ批評の継続のみならず、人種性への広がりや今後の展望に至るまで、ヘミングウェイ研究の変遷を辿ることができる。この章で中心的に扱われるジェンダー／セクシュアリティ批評は、続く第2章の谷本千雅子氏による「ヘミングウェイをクィアする—イン／アウト批評からの脱却」において、同性愛嫌悪を排除するクィア・リーディングを導入し、テキストのさらなる読みの可能性を拓く斬新な論考に引き継がれている。一方、1930年代にヘミングウェイが居を構えた島、キー・ウエストの地理的、歴史的特異性に着目した宮本陽一郎氏の論文、第3章「ヘミングウェイの南西島共和国—文学、革命、観光」は、「持つと持たぬと」を「ディアスポラ小説」として再定位させ、従来とは異なる解釈へと読者を導いてくれる。また第4章の比嘉美代子氏による「ヘミングウェイのアフリカ—理想郷の破壊要因と復活への試み」は、「アフリカの緑の丘」、「夜明けの真実」を中心に、個人としてまた作家としての自己実現を目指したヘミングウェイの原始性への回帰願望を読み解き、続く第5章の島村法夫氏による「激動の時代の中で—ヘミングウェイと主題としての戦争」は、報道記事や初期の短編から「老人と海」に至るまで、ヘミングウェイ自らが被弾体験に対してどのように向き合い、いかに作品へ昇華させたかについて明快に跡付けており、それぞれ「アフリカ」、「戦争」という大きなテーマを包括的に扱った説得力のある論文である。

また評者が最も興味深く読み通せたのは、以下に続く3つの論文である。第6章、新聞芳生氏の「乾いた傷と濡れた傷—スティグマから読む「日はまた昇る」」は、身体性に立脚して登場人物たちの身体に刻まれた傷跡に着目し、ボディ・ポリティックとの関連性を解き明かしながら、「告白＝告解のテキスト」として「日はまた昇る」を緻密に考察した論文である。また第7章の小笠原亜衣氏による「フレンチ・“セザンヌ”・コネクション—ガートルード・スタインとパリのヘミングウェイ」は、20年代のパリに見られた芸術におけるジャンル横断の実験において、セザンヌ絵画の構図がスタインおよびヘミングウェイの創作に与えた技法上の影響について丹念に追及することにより、ヘミングウェイのモダニズム研究に新たな光を投げかけている。続く第8章の

長谷川裕一氏による「ヘミングウェイとフォト・ジャーナリズム—「エスクァイア」、「ライフ」、そして「老人と海」へ」は、1930年代におけるフォト・ジャーナリズムの隆盛に伴い、読者の関心が作品から作家自身へと向けられ、やがて一人の作家ヘミングウェイ自身が実像から虚像へと変貌していく現象を跡付ける。そしてヘミングウェイが雑誌等に寄せた記事や、メディアが書いてきた彼についてのテキストに対する「二次的資料」という位置づけを脱却した研究の必要性を説いている。

第Ⅱ部には、アメリカ作家とヘミングウェイ文学との関わり合いについて、論者の博識と鋭い洞察力が織り成す5つの労作が収められている。まず第9章、後藤和彦氏による「ヘミングウェイとマーク・トウェイン—〈女〉をめぐるアメリカ文学的因縁について」は、主に「不思議な少年、四四号」のマルゲットと『日はまた昇る』のプレットを比較分析し、二人の作家による女性の描かれ方を追求した論文である。また第10章の伊藤詔子氏による「ソロー、ヘミングウェイ、T・T・ウィリアムス—ネイチャーライティングから反自然誌へ」は、「ウォールデン」と「ビッグ・トゥー・ハーティッド・リヴァー」の類似性を説き、一方で「午後の死」と「リーブ」を比較検討しながら、ヘミングウェイ作品を反ネイチャーライティングとして読み解く。続く第11章、上西哲雄氏の「国籍離脱者と残留者のきざな—ヘミングウェイとフィッツジェラルドを結ぶもの」は、未曾有の経済的繁栄を誇るようになった1920年代のアメリカを二人の作家がどのように捉えたのかを鮮やかに浮かび上がらせている。また第12章の平石貴樹氏による「ヘミングウェイとフォークナー—個人主義をめぐるふたつの態度」は、フォークナーが「構成された自己」を描き出したのに対して、ヘミングウェイが「空虚な自己」の達成に向けて果敢に挑んだ側面を浮き彫りにし、「氷山の理論」のみならず「抑圧の理論」がヘミングウェイ文学を特徴付けていると説く。そして第13章の柴田元幸氏による「ヘミングウェイと現代アメリカ文学—反発と継承」は、ヘミングウェイに影響を受けたアメリカ作家に言及した上で、ヘミングウェイとカーヴァーの作品を比較検討し、カーヴァーが現代の「われらの時代」の悲惨を物語っていると説く。

第Ⅲ部「ヘミングウェイとFBIファイル—ファイルの空白に見る隠された素顔」は、総勢21名による「FBIファイル解説プロジェクト・チーム」を結成し、ヘミングウェイに関するFBIファイルの解説作業と内容分析を行い、高野泰志氏が解釈を加えて新たなヘミングウェイ像を提示した実証的研究成果である。しかし、評者も参加させていただいたこのFBIファイル解説を通じた作家の新たな側面の解明の試みは、さらなる資料を追加した議論を行う必要性を感じさせるものでもある。

第Ⅳ部の今村楯夫氏による「ヘミングウェイと日本作家」では、インタビューを通して、小川国男が創作技法上においてヘミングウェイからいかなる影響を受け、作品が生み出されていったかについて明らかになる他、飯島耕一による〈戦後〉の原風景を描く二つの詩とその解説は、比較文学研究への発展の可能性を示唆してくれる。また巻末の千葉義也氏による「ヘミングウェイ基本文献」は、作品から研究書、トラベルガイドブックに至るまで重要な文献を丁寧に網羅したものである。

評者による強欲を述べさせていただけるならば、「まえがき」でも言及されているヘミングウェイのキューバや「老人と海」をポスト・コロニアリズム的視点から再読する論考もぜひ収録して欲しかったという個人的な思いはある。しかし本書は、歴史的、社会的、文化的存在として

のヘミングウェイに新たな光を投げかけ、従来の批評活動において看過されてきたテキストのさまざまな表象を多面的に照射し、細部に至る精緻な読みが実践される批評水準の極めて高い啓発的な論集であり、21世紀の今なお読み継がれ、多様な批評を取り込みながら進展していくヘミングウェイ研究に多大なる示唆と影響を与えてくれる。

廣瀬英一著 『ジョン・ドス・パソスを読む』

(三重大学出版会、2006年12月、223pp.、本体2,200円)

上 西 哲 雄

ポストモダニズムの議論がやや煮詰まる中、そもそもモダンニズムとは何だったのかとの見直しの機運が広がり始めている。モダニズムと言えばアメリカ文学においてはフォークナーの小説やパウンドの詩のように実験的なスタイルが代表的な現象のひとつと言って差し支えあるまい。その上でアメリカのモダニズム文学を振り返った時に、再検討する必要があるのはドス・パソスの評価だ。

こうした時に中四国アメリカ文学会の会員として長く会のために貢献されてきた三重大学名誉教授の廣瀬英一氏が本邦初の本格的なドス・パソスの研究書を刊行した。氏は早くからドス・パソスの重要性に注目して様々に分析を試みており、モダニズム見直しが叫ばれる今このようにその成果を世に問うたのは時機にも適い意義深い。

本書が扱うのは代表作と目される『マンハッタン乗換え駅』(1925)と『U. S. A.』三部作(1938)および評価は分かれるものの後期の代表作とされる『世紀の半ば』(1961)のみである。ドス・パソスの伝記的背景や時代背景あるいは他のジャンルのモダニズムなどには敢えて触れず、三作のテキストの精読を専らとしている。言語実験としてのモダニズムの事例としてドス・パソスを扱うにはまず行わなければならない作業に違いない。

構成は各作品ごとに一章を設けてそれぞれに分析を施すというスタイルをとる。第一章の『マンハッタン乗換え駅』は39ページを3つの項に分け、第二章の『U. S. A.』は121ページを6つの項目に分け、第三章の『世紀の半ば』は24ページを費やすが項目分けは無い。この紙数と項目数の違いはそれぞれのテキストの複雑さの違いもあるが、氏の各作品に対する評価の差を計らずも反映している。

第一章の『マンハッタン乗換え駅』は「1. 構成」、「2. 文体と視点」、「3. ニューヨーク」の3項からなる。本作品の構成は文学のコラージュさながらに136の断片的なエピソードが連なって出来ている。これらのエピソードは18の章に分けられており各章冒頭にはエピグラフがついている。そもそも物語というものは出来事を因果でつないだ筋立てで構成され、そこをひとりの主人公が駆け抜けることにより物語の初めと終わりの間で内的な変化を獲得するというのが当

たり前だと思っている読者には、なかなか読みにくい小説だ。

氏の戦略は描く対象が都市であることを意識することである。「1. 構成」では一見したところ混沌とした構成がむしろ20世紀の都市を描くのに如何に最適であるかを的確な引用を用いながら周到に示す。都市に最適なスタイルということは「2. 文体と視点」でも強調される。同じく都市を描くセオドア・ドライザーやソール・ペローと比較しながらドス・パソスの文体や視点の動かし方がどのような都市空間を浮かび上がらせるかを解き明かす。「3. ニューヨーク」では作品の中に作者の意見が明示されていないことに注目する。都市に対する作者の心情はスタイルにこそ読み取れるとする。都市を描くスタイルを読み解くという視点が、作品に有機的な構造を立ち上がらせる。

第二章で扱う「U. S. A.」は「マンハッタン乗換駅」以上に複雑な構成を持つ。新聞記事や流行歌などの文章の断片によってコラージュのように構成された68の「ニューズリール」、作者の自伝的な出来事のスケッチや心象からなる51の「カメラ・アイ」、物語の舞台となった20世紀初頭に生きる27人の実在の人物の「伝記」、12人の主人公の物語を総計52に分けた「物語」と、それぞれスタイルの違う4つの部分からなる。

本書ではすぐにはこうしたスタイルについての解説に入らない。「1. 総序「U. S. A.」」は作品全体の序であるかのような「U. S. A.」と題された冒頭の短い章を分析する。その意図はその中で全3巻の結末に配された「浮浪者」という短い部分との関係に言及することから明らかで、この混沌とした実験小説に意外にも始めと終わりがあり、伝統小説には欠かせない緊密な結構が意識されていることを示している。モダニズムを考える時に、テキストの深層にある伝統的な物語作りの残滓を意識することは重要なことだ。

次の「2. 「カメラ・アイ」評釈」は第二章の中では最も長い項であり、更には第一章よりも第三章よりも長い。引用と氏の評釈を読み進めるとすぐに気づかされるのは、作者の極めて個人的な視点によって構成されているかのような「カメラ・アイ」が社会的なコンテキストに対して開かれていることである。ここに最も多くの頁を割いたところに氏がドス・パソスの核心を社会性の表出の仕方に見ていることが分かる。「3. 「物語」の文体」の項において強調されるのは素っ気無い文体である。細部の書き込みが極端に控えられているだけではなくて省略の向うに心理や情感を想像することすら拒否する文体にこの混沌とした物語を疾駆させるエネルギー源を見ている。同じく「物語」を扱う「4. 「物語」の登場人物」では、以上のような文体で表現される歴史の圧倒的な流れの中で、登場人物達の立ち向かい敗れる様が如何に表現されているかを示す。一方で歴史的な人物が「伝記」として全編に散らされていることが、「物語」で扱われる無名の人々の雄々しさと敗残を強調しているとしている。スタイルに社会性を読み取ることが本書の肝要である。

「5. 四部分の関連」では、「ニューズリール」「カメラ・アイ」「物語」「伝記」がどのように係わり合っているかをまとめた上で、すべての部分で20世紀最初の30年間について緩やかに時間の流れに沿って語られ、それが全体として緩やかなまとまりと意外な読みやすさを作品に与えていることを指摘する。「6. 1930年代と「U. S. A.」」では、こうしたスタイルよりもその内容が注目されて政治的な評価に翻弄される原因になったとした上で、そうした評価に終始する先行の研究をも視野に入れながら、作者も作品も、政治よりも遥かに言語芸術としての革新にベクトルが

向いていると氏は主張している。

第三章で扱う『世紀の半ば』は「U. S. A.」と同じく4つの部分から成る。「ニューズリール」に相当する「ドキュメンタリー」、「U. S. A.」と同じく「伝記」、「物語」があるほか、「U. S. A.」にあった「カメラ・アイ」が姿を消して「調査官ノート」なるものが登場する。「調査官ノート」は肥大化した労働組合の横暴を明示的に告発したものとなっていて、「カメラ・アイ」に比べるとより社会性がしかも政治的な立場を鮮明にした形で前面に出ている。しかしそうしたことも含めてもスタイルは「U. S. A.」を概ね引き継いだ形になっていて、氏はこの作品を「アメリカとは何か、アメリカ的価値とは何か、と問い直す」という点で「U. S. A.」と「問題意識を共にする」(184)としている。

このように本書は作品の精読という基礎的な作業に終始して氏の篤実な人柄を髣髴とさせる。一方でそうした内容であるからこそ実は、言語の実験という観点から見た時に、本書がドス・パソスをモダニズム見直しの議論のスタート地点に重要なテキストとして置いたことも間違いのない。しかしあくまでスタートに置いたに過ぎないドス・パソスの見直しをイズム見直しの議論にありがちな空疎なスローガンの応酬の陰に埋没させないためにも、引き続き氏が議論に参戦され続けることを願ってやまない。

Yoshifumi Kato and Scott Pugh, eds. *John Steinbeck: Global Frameworks*.

(Osaka : Osaka Kyoiku Toshō, 2007. xviii + 236pp, Hardcover. ¥2,940.)

濱 口 脩

本書は、「第6回スタインベック国際会議」(2005年6月6日～9日、京都ガーデンパレス)の会議録のうち、主に日本からの参加者の論文15篇をまとめたもの。残りの発表論文(全部ではない)も、Kyoko Arika, Luchen Li, and Scott Pugh, eds. *John Steinbeck's Global Dimensions* (Metuchen, N.J.: Scarecrow, 2007)として出版された。1976年8月九州大学に日米の研究者が集った第1回国際会議以来交互に両国のスタインベック協会が主催してきたが、今回はスロベニア、大韓民国、中国、インドからの参加者も最新の研究成果を披露して、充実した内容であった。

本書は、当時日本スタインベック協会会長として会議の実行委員長を務めた中山喜代市氏と副委員長Stephen K. George氏(2006年11月逝去)に献じられている。

Forewordで中山氏は、会議のテーマ“John Steinbeck: Global Dimensions”がテツマロ・ハヤシ氏の示唆であり、本書のタイトルも太平洋を挟んでその会議録が刊行されるのに困っており、会議自体は、創設以来一貫して斯界を指導してきた橋口保夫氏、ハヤシ氏、それに故エレン・スタインベック夫人に捧げるといふ氏の積年の願いが叶ったことを明かしている。

会議の事務局長を務めた加藤好文氏は本書の編集主幹としてAcknowledgementsの中で、中山氏

の会議に対する献身的寄与と本書刊行のための財政的支援、それに共同編集者Scott Pugh氏の職務への惜しみない貢献があったこと、を特筆している。巻末のIndexは氏の労苦の賜で、所収論文の内容・特徴を端的に示しており、クロスレファランスなどに便利である。

Pugh氏のIntroductionは全論文の要点・主張を要領よく紹介しており、読者が氏のバランス感覚優れた学識と慧眼に感服すること請け合い。まず、スタインベック文学のglobal性を、作家の実人生、文学の普遍性、そしてグローバルな研究によって示す。次に、所収論文は日本在住の研究者によるものであるが、その観点は幅広く地理的制約を受けていない、と総括する。以下、共通項で7つに分類して簡潔な紹介と適確な註釈が続く。たとえば、井上博嗣氏の「菊」論は従来とは異なるtinker観をベースに新解釈を展開しており、村上裕美氏と中島美智子氏の論考はスタインベック文学には発掘可能な批評の新たな鉱脈があることを実証している、と評価している。

全体は、Part I Gender Representations、Part II Stylistic and Structural Issues、Part III Evolving Critical Perspectivesに大別される。掲載順に各論文を簡単に紹介する。

[Part I] はジェンダー論5篇。井上稔浩：John Steinbeck's Man-made Menでは、スタインベックの描く男は、そして結局は女も、米国という資本主義社会の原理に支配された結果、人間性と能力を抑圧されている、と結論する。井上博嗣：Tinker as Liberator: A Study of "The Chrysanthemums" は、Elizaに夫Henryがかけがえのない存在であることを気づかせてくれたのは他ならぬTinkerと位置づけ、その彼を無自覚の「解放者」と見なす物語後半部の解釈は卓見。論旨明快、必要にして十分な議論、引き締まった構成は一気呵成に読ませて痛快な読後感を与えてくれる。岩瀬恒子：The Credibility of Cathy Ames' Personalityは、「怪物」Cathyの人格の信憑性を米国精神医学会の診断基準に照らし検証する、新たな角度からの研究成果である。大須賀寿子：Women Wanting to Be Mothers, Women Refusing to Be Mothers: Motherhood as a Predominant Theme in Steinbeck's Fictionでは、母親、母親を拒否した女、子供のいない妻たちをmotherhoodの観点から考察する。鈴江璋子：Sex, Reproduction, and the Sacrifice of Life in Steinbeck's Fictionは、妊娠や出産を経験した4人の女性を組上に載せ、性・生殖・犠牲のテーマがスタインベック文学の基本構図にいかなる影響を及ぼしているのかを論じている。

[Part II] は文体論4篇。馬渡美幸：John Steinbeck's Art and Craft in *The Pastures of Heaven* and "Johnny Bear" では、PasturesにおけるMunroe家の役割を検証することで物語作者スタインベックの確立が跡づけられており、氏の綿密で丁寧な分析が光る。村上裕美：Steinbeck's "The Snake": A Cognitive Linguistics Viewpointは、近年の認知言語学と文体論の知見を文学作品の読みに援用して「蛇」の小説世界がいかに緻密に構築されているのか、言語表現にこだわりながら解明する（従って説得力がある）作品分析と解釈の地平を拓いた秀逸な論考。高平有希：The Grapes of Wrath: A Movie Made Under Pressureは、30年代ハリウッドの過酷な状況下での映画化は原作の様々な変更を余儀なくされたが、当時の社会が抱えていた矛盾を暴露し、しかも未来に希望を与える演出となっている点は評価できると結ぶ。金子淳：Narrative Structure in *The Grapes of Wrath* and Non-Teleological Thinkingは、物語章・中間章というGrapesの語りの構造を解明するためには非目的論的思考という作家の世界観の存在は無視できない、と主張する。

[Part III] は新たな批評の可能性を示す論文など6篇。中島美智子：The Idea of Land in *The Grapes of Wrath*は、Grapesを土地と人間との関係についての環境文学と見なし、作家の鋭い先

見性を読み取る。エコクリティシズムは氏の一貫した研究テーマであり、新たな批評の可能性を予感させる論考。Randy Checketts: *East and Eden: Two Simple Words and Much Confusion*では、この2語の文化的・神学的なニュアンスを辞典や聖書に探り、作家が作品に込めた深い意味を考察している。酒井康宏: *John Steinbeck's The Pastures of Heaven: An Interpretation from the Celtic Viewpoint*は、氏のケルト(アイルランド)文化に関する研究の一環に組み込まれる。ケルト民話・お伽噺に*Pastures*との多くの類似性を指摘しており、有益な情報に富む。中垣恒太郎: *In Search of America: Representations of the Other and the Multi-Cultural Future*は、アジア系アメリカ文学研究の立場から、米文学の本流に位置するスタインベックは、M.トウェインの描くAh Sin同様、少数者とりわけ中国系アメリカ人の真の声を代弁することはなく新たなステレオタイプを作り上げてしまっている、と結論する。山内 圭: *Globalization of John Steinbeck*は、一般大衆によるスタインベック文学の受容状況をアンケート調査(米国、豪州、日本)とwebsite検索(カナダ、英国、独、仏)によって示す。データは興味深く、*Mice*、*Grapes*はいずれの国でも人気があるようだ。橋口保夫: *Looking Back on Past International Steinbeck Congresses*は、日本スタインベック協会の生みの親・初代会長として斯界をリードしてきた氏の貴重な記録であり、今後の学会の方向性を示唆する指針ともなる内容である。その心は「温故知新」、伝統に立脚し、新しく現代を認識することである。

付録として、本国際会議の全プログラムと寄稿者・編集者の紹介が添えられている。本書は、有木氏の*Dimensions*同様、最新のスタインベック文学研究の動向を知るには必読の書である。

杉浦悦子著 『アジア系アメリカ作家たち』

(水声社、2007年5月、228頁、定価2,800円+税)

元 山 千 歳

アジア系アメリカ文学を論じた日本語による研究書は、それほど多いわけではない。エレイン・キムの「アジア系アメリカ文学——作品とその社会的枠組み」、アジア系アメリカ文学研究会編の「アジア系アメリカ文学——記憶と想像」がその代表作だといえるだろう。前者はアメリカ社会におけるアジア系を、後者は歴史や戦争などさまざまな視点からアジア系を論じるが、ともに狙いは、アジア系アメリカ人とその文学の特質を描出することにある。本著は、アジア系アメリカ人作家とその文学の特質を記すことによってそれを問いつづけようとする。その方法論が的確かどうかは、さらに読者の判断をまたねばならないが、記すことによって問うという杉浦のポストモダンな構えは、新たなアジア系批評をたしかに予感させる。

「白鳥を抱えてアメリカにきた女」、「第一章 ジークリード・ヌネ」、「第二章 シンシア・カドハタ」、「第三章 カレン・テイ・ヤマシタ」、「第四章 ジェンバ・ラヒリ」「註」「参考文献」「さ

まよう心——あとがきにかえて」という構成である。

「白鳥を抱えてアメリカにきた女」は、70年代以降アジア系はどのように自己を表しはじめたかについての総論である。選集「アイイエエエエ！ アジア系アメリカ作家紹介」（1974）をはじめ、キングストンの「チャイナタウンの女武者」（1976）、クローネンバーグ監督によって映画化（1993）されたホアンの「エム・バタフライ」（1988）、日系作家のジョン・オカダ、ワカコ・ヤマウチ、さらにハワイの作家たちや、80年代の韓国系、インド、パキスタン、スリランカなどの南アジア系、そして90年代になってますます多様化するアジア系アメリカ文学総論でもある。ここで問題にされているのは、キング＝コック・チェン編「アジア系アメリカ文学インターエスニック・ハンドブック」（1997）の出版から10年たったいま見えている、アジア系作家たちの、出自、生国、経歴における多様化と複雑化である。フェミニズム、精神分析、ポストコロニアリズム、エコロジーなど、学際的アプローチにたえる作品テーマの多様性である。

ジークリッド・ヌネの「神の息に吹かれる羽根」（1995）は、パナマ系中国系の父親とドイツ系の母親にアメリカ人として育てられた「わたし」が、父母とコミュニケーションするときに体験するズレや歪みに耳を傾ける物語である。「自分の中の外国人に目覚め、英語と外国語、二つの言葉の境目の（あるいは接点の）不安定な位置に身を置き、そこで、どちらの言語にも属さない翻訳の言葉を探しつつ語る翻訳家になる物語として読むことができる」と記されるが、この読みは、本著の論を進展させる力でもあり、つづいて論じられる「ミッツ」（1998）や「ルーエナのために」（2001）においても実践されることになる。

シンシア・カドハタの「フローティング・ワールド」（1989）は、灰色のセダンで仕事を求めてアメリカ各地を転々とする、七人家族の物語である。すでにわれわれの知るように日系は、強制収容の歴史を記憶するが、キャンプ生活にあって習字、生け花、お茶などの日本文化を世代を越えて共有した。この意味において、戦後アメリカの50年代に彷徨う大家族は、日系の歴史的悲劇を表し、祖母、母との関わりにおいて自己構築する三世オリヴィアは作者カドハタに重なる。ミチコ・カクタニ、トレイズ・ヤマモト、フィリップ・カフカ、キング＝コック・チェンなどの研究者が、アジア系・日系・女性という視点からカドハタ論を展開していることをふまえ杉浦は、環境破壊が悪化し大気汚染がすすむ2052年のロサンジェルス、アルテカという惑星、をそれぞれ舞台にする「愛の谷間の中心で」（1992）と「ガラスの山脈」（1999）の異質性を、作者カドハタが企てるアジア系という類型越境として読む。

カレン・テイ・ヤマシタは、そのデビュー作から、アジア系アメリカ人という枠を超えようとしてきた。あるいはルス・オゼキにしてもそうだが、日系アメリカ人作家というステレオタイプな期待を超えようとしてきた。「熱帯雨林の虹の彼方へ」（1990）の舞台はブラジルであり、混血やハイブリディティを意識するテキストであり、カズマサ・イシマルは、名前をのぞいて日本らしさをあまりもたない主人公である。だから杉浦にとって「ブラジル丸」（1992）もまた日本人の出嫁ぎを問題の中心にしているのではない。モモセ先生というキリスト教伝道師に共感し、1925年、新しい国創生の夢を抱いて「ブラジル丸」で太平洋を渡り、理想郷エスペランサをつくりそこに生きる人々の、移動と無国籍性を描くことにヤマシタの関心はある。それとも「オレンジ回帰線」（1997）は、オレンジを利用した麻薬密輸、移植用に幼児の臓器を売り買いする国際的密輸組織、ロサンジェルス・フリーウェイの渋滞など、など、交差する社会問題の幻想コラー

ジュである。

ジュンバ・ラヒリは、インド系アメリカ人を描くが、サイードの言う「亡命知識人」、家郷を離れるがアメリカに同化することなく、アメリカに吸収されることを求めることもなく、そのどちらでもありつつ流動するアイデンティティを問題にする。2000年ピューリッツア賞の『病の通訳者』は9つの短編からなるが、おもな舞台をアメリカの大学町とする小説空間は、宗教、政治の違いを超えたインド、不安と望郷で結ばれた異国、インドでもアメリカでもない「望郷という箱船のような空間」である。そこで他者たちは遭遇する。大人と子供、一世と二世、亡命者とインド系アメリカ人など、さまざまな境界によって隔てられた者たちは越境し、理解し、愛しあう。境界のどちら側にも居場所を定めない作者ライリもまた、登場人物とわれわれ読者のあいだの通訳者／仲介者である。ベンガル出身のインド系アメリカ人ディアスポラを描く『名前をくれた人』(2003)にあってもこの構えの変わることのないラヒリについて、「グローバル社会にあって、無数の個を抱えて、変容に富む個の生き方を容認する寛容な世界を目指すアジア系アメリカ作家の地平線を示しているように思われる」と杉浦は記す。

「さまよう心」において、ヌネ、ヤマシタ、カドハタ、ラヒリを論じるにいたる動機が記されるがそれは、アジア系に「こだわらないことにこだわる」作家たちだからだ。「どの領域にもどのアイデンティティにもとどまることなく流動に身を任せ、さまよう心に導かれつつ、幾重にも層をなす未知の自己を探り出し、創造していく作家たち」だからだ。ヌネの『末裔』(2006)カドハタの『草花の少女』(2006)をさいごに紹介するにあたって、常に未知の分野へと足を踏み出していく「さまよう心」の女性作家たちだと記すとき、杉浦悦子は、これら女性たちに交差しつつ立ち現れる自画像を見ようとしているように読めてしまうのは、はたして私だけだろうか。

上岡克己／上遠恵子／原 強 編著 『レイチェル・カーソン』

(ミネルヴァ書房、2007年5月、viii+175pp、本体2,500円)

松 永 京 子

レイチェル・カーソン生誕百年を記念して2007年5月27日に出版された本書は、作家の生涯や同時代性、科学と文学の融合、教育問題、ジェンダー論など様々な角度からカーソンの世界を映し出す論集となっている。本書の特徴の一つは、専門家ばかりでなく一般読者にも分かりやすい文章を常に心がけていたカーソンの執筆姿勢を念頭に置いていることであり、幅広い読者層に向けて書かれた親切な解説書としての役割も果たしている。本書は多彩な分野からの執筆陣による十二本の論考を掲載しており、第Ⅰ部「レイチェル・カーソン一人・思想・評価」、第Ⅱ部「海の三部作」、第Ⅲ部「『沈黙の春』—世界を変えた本」、第Ⅳ部「未来へのメッセージ」の四部から構成されている。

第Ⅰ部には巻頭に、カーソンの生涯とその歴史的背景が彼女の作品や表現方法の確立にどのような影響を与えてきたかを叙述する上遠恵子氏の第1章「レイチェル・カーソンの生涯」が置かれる。自然や文学に傾倒していたカーソンの子供時代が、海洋生物学への興味、文筆者としての情熱へとつながっていく経緯や、二項対立的分野と見なされていた文学と科学を融合させたカーソン独自のスタイルを紹介する本章は、カーソンの人物像を鮮やかに描きだしている。次に続く鈴木善次氏の第2章「レイチェル・カーソンの思想と現代」は、まず「環境」という視点から人類史を振り返り、「科学技術」を問い直す時代として「現代」を位置づける。氏の提唱する「生態学的倫理」（生態系のバランスを重んじる考え）が、人間活動としての科学を肯定しながらも「安易な技術主義」に陥りがちな科学のあり方を批判するカーソンの思想に繋がっていることを示しながら、環境教育のヒントを与えてくれる重要なテキストとしてカーソン作品を再評価する。上岡克己氏による第3章「レイチェル・カーソンと緑の文学」は、伝記や研究書にみるカーソンの文学的評価を網羅しながら、カーソン作品の文学的意義を「緑の文学」（ネイチャーライティングや環境文学と呼ばれる文学の総称）の視点から改めて論じている。科学者として高く評価されていたカーソンが、文学研究の対象としても認められていく過程が丁寧に跡づけられている。

『沈黙の春』で最もよく知られるカーソンであるが、『沈黙の春』以前にカーソンの名を広めたのは海の三部作と呼ばれる『潮風の下で』、『われらをめぐる海』、『海辺』であった。第Ⅱ部ではまず、浅井千晶氏の第4章「レイチェル・カーソンと海の文学」が海の三部作の全貌を明らかにし、カーソンの詩的想像力と科学的正確さを融合した重要な作品群としてこれらを位置づける。本章では、一般読者に訴えるためにカーソンが、生物の行動を人間のそれに置き換えたり、魚に共感を示す漁師の描写を含めたりといった工夫を凝らしていたことが指摘されている。続いて三浦笙子氏による第5章「海のベストセラー『われらをめぐる海』と『海辺』」は、カーソンを海洋文学作家から環境文学作家へと変えた海のベストセラー二作に注目する。『われらをめぐる海』と『海辺』に読み取ることでできるカーソンの環境哲学論を展開しながら、海の永続性／非永続性のテーマへと広げていく論考は、まさに氏の慧眼を示しているといえよう。

『沈黙の春』論が展開される第Ⅲ部のはじめには、『沈黙の春』出版にいたるまでの経緯や出版後の評価を詳しく解説し、『沈黙の春』以降の環境主義の変貌を概観する原強氏の第6章「世界を変えた一冊の本」が置かれる。原氏は『沈黙の春』を「環境問題に関する新しい思潮と運動の流れを作り出す一冊の本」(90)であると述べ、『沈黙の春』と新環境主義の接点をさぐる。吉田美津氏による第7章「女性と自然—ジェンダーと科学、そしてポストナチュラルの世界へ」は、『沈黙の春』研究において考察の余地のあるジェンダー問題にメスを入れ、近年注目される生物多様性と多民族社会の問題に迫る示唆に富んだ論考である。ジェンダーと科学の発展の関係を論じるエヴリン・フォックス・ケラーに言及しながら、生物の多様性重視への思考が、女性とセクシュアリティを排除してきた科学的言説によっていかに軽視されてきたかを暴き、さらにカーソンの描く「生命の連鎖」が多民族共生を一縷の望みとするカレン・テイ・ヤマシタの『熱帯雨林の彼方へ』に引き継がれていることを例証している。続く伊藤詔子氏の第8章「『沈黙の春』—環境的アポカリプスと汚染の言説をめぐって」は、『沈黙の春』の二元論的レトリックの源泉を辿り、環境的アポカリプスの言説に繋がる文学的手法を考察する。本章は、タイトルの変換をめ

ぐって「沈黙の春」の間テクスト性を追求しながら、ソローとカーソンのもつ環境への感受性が「二元論的にジェンダー化されている」(114)ことを鋭く指摘する。また、カーソンの終末的ナラティブを「冷戦のナラティブ」や「汚染の言説」に結びつけ、農業汚染による破壊をめぐる二元論的レトリックが癌表象や核汚染の言説につながると論じている。

第Ⅳ部は「センス・オブ・ワンダー」をめぐる、四人の執筆者がカーソン作品の発する「未来へのメッセージ」を語る。竹内通夫氏の第9章「『センス・オブ・ワンダー』と幼児教育」は、子供の発達に関する相互作用論や「子供の新しい発見」を強調したジャン・ピアジェの思想に、カーソンの「センス・オブ・ワンダー」(驚異の感覚)との共通項を見だし、服部道夫氏による第10章「『センス・オブ・ワンダー』とネイチャーゲーム」は、自然学習運動の影響を受け、母との自然体験から形成されていったカーソンの自然観を「ネイチャーゲーム」によって実践に移していく方法を紹介する。両氏とも、カーソンの自然観を未来に継承していく方法を明確に示しており、カーソン作品に対する敬愛と熱意を感じた。「センス・オブ・ワンダー」は作家の高田宏氏にもインスピレーションを与えたようで、高田氏による第11章「『センス・オブ・ワンダー』をめぐる」は、カーソンの描く姪の子供ロジャーと自然との関係に、筆者自身も経験した「幼い者と自然との深い共生感覚」を見いだす。岩政伸治氏による第12章「『失われた森』—解毒の文学」は、遺稿集「失われた森」が「センス・オブ・ワンダー」の源泉であることを例証しながら、そこに「個から種へ、種から生態系へ」と発展するカーソンの意識の系譜を読み取り、さらに遺稿集に綴られたカーソンの記録が地球規模の記憶をたどる行為であることに注目し、過去の記憶により成立する現在が未来をも占うと結ばれる。

個々の論は、エッセイ的なものから本格的文学研究まで様々な形態をとっているが、総じて主要作品がバランスよく網羅され、カーソンの全体像を捉えるのに適した一冊となっている。伝記的事実や引用箇所重複が少し気になったが、研究者や専門家にとっても新たな発見の多い論文集であると同時に、カーソン作品を愛読しその理解を深めたいと思う一般の読者にとっても最適な一冊であるといえよう。本書は他にも、「レイチェル・カーソンの年譜」や「地名でたどるカーソン」など有益な資料が豊富に収録されている。

編 集 後 記

【中・四国アメリカ文学研究】(第44号)をお届けします。今回は10名の論文投稿希望者があり、編集委員会として最終的に受理した論文は5編でした。厳正な審査の結果、2編の採用となりました。今号の執筆者の氏名と所属機関は以下のとおりです。

本 田 良 平 (広島大学・院)
本 岡 亜沙子 (広島大学・院)
藤 江 啓 子 (愛媛大学)
藤 本 幸 伸 (広島文教女子大学)
辻 祥 子 (松山大学)
大 島 由起子 (福岡大学)
本 莊 忠 大 (旭川工業高等専門学校)
上 西 哲 雄 (東京工業大学)
濱 口 脩 (広島大学)
元 山 千 歳 (京都外国語大学)
松 永 京 子 (日本学術振興会特別研究員)

英文校閲は Ian Willey 氏 (香川大学) に依頼しました。今年度の編集委員は次のとおりです。

横 田 由 理 (広島国際学院大学)
新 田 玲 子 (広島大学)
藤 本 幸 伸 (広島文教女子大学)
松 島 欣 哉 (香川大学)

次号は2009年6月に発行の予定です。会員の皆様からの多数のご投稿をお願いします。投稿希望のご連絡は、e-mailでも受け付けます。編集責任者 (matusima@ed.kagawa-u.ac.jp) または事務局までご連絡下さい。また、過去一年間に会員が関わって出版された研究書等のなかで、優れたものの「書評」を掲載しますので、事務局と編集責任者までご献本をお願いします。

本号より、会誌をPDF化し、ホーム・ページで公開する予定です。これまでの会誌については、目次のみ公開の予定です。ご活用下さい。なお、著作権は、執筆者本人と中・四国アメリカ文学会に帰属するものとします。

(M.K.)

投稿規程

1. 枚数：(a)日本文の場合は400字詰横書き原稿用紙に30枚以内。ワープロ等を使用の場合は、A4判用紙に横書きで30字×30行とし、14枚以内。これとは別に必ず英文のシノプシス（約500語）をつけること。
(b)英文の場合はA4判用紙に65字×25行とし、20枚以内。ワープロを使用のこと。
2. 体裁：注をつける場合は、後注（Endnotes）とし、本文の終わりにまとめ、引用文献（Works Cited）を付すこと。本文中の引用の仕方、英文シノプシスおよび英文原稿のスタイルに関しては、日本アメリカ文学会の会誌「アメリカ文学研究」の投稿規定（『MLA英語論文の手引き』第6版）に準じる。
3. 締切：2009年1月10日 期限厳守
4. 宛先：〒761-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部 松島欣哉
5. 提出部数：5部（コピー可）。5部のうち1部にのみ、論文表題と投稿者氏名（ふりがな）、現住所（郵便番号）、電話番号、所属を記した表紙を付し、すでに口頭発表した旨の注記や謝辞なども表紙に付すこと。他の4部は表紙を付さず、第1ページは表題と本文のみとし、以降も投稿者氏名を記さないこと。
6. その他：投稿ご希望の場合は、2008年10月末日までに、(1)論文タイトル、(2)和文・英文の別、(3)予定枚数、(4)氏名、(5)所属、(6)住所（TEL）を、葉書で上記4の宛先までご一報ください。

提出された原稿は返却しない。採用決定後、フロッピーディスクを提出すること。その際、機種名、ソフト名を論文タイトルと合わせて明記すること。尚、掲載論文1篇につき2万円の執筆分担当金を初校時に請求します。

「シンポジウム報告」執筆要領

1. 年次大会のシンポジウムを「中・四国アメリカ文学研究」に「報告」として掲載する。
2. 内容：会報に掲載される「要旨」とは異なり、発表時点の内容を反映させるもので、プロシーディングに準じる。
3. 形式：シンポジウム全体のタイトル、コーディネーターによる「まえがき」、および各発題者の個別のタイトルと報告の順序で構成し、発題順に掲載順とする。尚、シンポジウムで発表したものが本会誌に論文として掲載されるときは、「まえがき」にその旨を記して、その発題者の「報告」は割愛する場合もある。
4. 文字数および体裁：「中・四国アメリカ文学研究」の投稿規程に準じ、原稿の1頁はA4横書き（30字×30行）とする。ただし、「まえがき」と各報告の原稿枚数は「注」と「Works Cited」を含んで、それぞれ5枚程度。英文シノプシスは不要。
5. ハードコピーおよびフロッピーディスクの提出：コーディネーターは各発題者の原稿を集約し、ハードコピーを4部提出すること。編集委員会で確認後、（必要があれば修正を施した）フロッピーディスク（タイトル、機種名、ソフト名を明記したもの）を提出する。尚、編集責任者との間で了解が得られれば、コーディネーターは完成原稿をEメールの添付ファイルとして編集責任者に送信しても構わない。ハードコピー提出の締切は会誌の投稿規程に準じ、毎年1月10日とする。
6. 執筆分担当金を支払う必要はない。

ISSN: 0835-0176

中国国文学研究 第44号

2008年6月1日 发行

编辑主任	中国国文学研究
发行人	林 康 次
编辑主任	松 島 依 子
〒 752-8535 神戸市中央区北长町2-1-1	
Tel & Fax: 078-737-2455	
email: yoshie@cc.kobe-wu.ac.jp	
URL: http://www.chinlit-sts.org/	
印刷	株式会社 印刷
〒700-0033 広島市南区上白旗1-10	
Tel 083-0834-6311 Fax 0837-35-7570	

Chin-Shinko Studies in American Literature, No. 44

Edited, published, and distributed by
the Chin-Shinko American Literature Society

Executive Office: Department of Literature, Graduate School of Education,

Kobe Women's University, 2-1 Aoyama,

Katashira-cho, Sumi-ku, Kobe, 651-8583, Japan

Tel & Fax: 078-737-2455

email: yoshie@cc.kobe-wu.ac.jp

URL: <http://www.chinlit-sts.org/>

Chu-Shi-koku

Studies in Japanese Literature

No. 41

June 1968

The Chu-Shi-koku American Literature Society